蘆屋道満大内鑑

作者　竹田出雲

風に皐青障の外、雨ゑ嘯古林の中尖れる鼈臺尾、小前大後色中和を兼、死すれゞ丘を首にす是此妙獣百歳誰か玄らん女を化し苔の褥ゑ草枕契りを人に同じうす、葉末の鶴や末の代に日月星度の光りをかゝく、昔をとへゞ天地の恵みゑ生立蘭菊や、チロシ「花ぞ都の香に匂ふ、朱雀帝の皇子櫻木の親王東宮に立せ給ひ、浄息所ハ、左大將備の朝臣元方のは娘、又參議小野の好古の浄息女六の君とヤせしも、錦帳に冊れ二人の君ハ兩翅比翼連理のはかたらひ淺からぬ、ざりしは中あり、されゞ朱雀帝賢王とヤせ共天地の氣候陰陽の狂ひにや頃日出る月影の、白虹につらぬかれ甚光りを失へゞ東宮のは方ゑおゐて此事評議有べしと勅を請、左大將元方小野の好古誌寮の司、末々の官掌迄次第を乱さず參列し晝迄殘る月影

の空を眺て取々に、愚意を述るも及びなき雲を摑がごとく〻、左大將筋取直し、熟思ふに三千世界月一ッ、日一ッ、天竺で見るも唐で見るも月日の光りゑ二ッゝなし、然れど白虹月を貫く此天災、強日本の崇共一圖にゝ定めがたし、万一唐天竺の禍あれば心を惱ます程が失墜あんや是といふ形の見ゆる時、評議あさるゝ共遲かるまじ、此義ゝ此儘捨置れ然るべしと相述らる、小野の好古正笏し、〻夫ゝ理屈一ぺん、聖主天下を玄ろし召民を惠みのゆ心にゝはづれたり、まぢかく喩を取ていゝゃ、日月の蝕の如く、此日本の内でさへ東國で見へぬ時も有西國で見へぬ折も有、況や境を經たる唐天竺、日蝕共月蝕共知ずに濟す事も有べし、此度の天變も其通り、唐天竺ゝいざ知ず、目下明らかゑ見付たる日本の禍あらずといひがたし、斯いへば迚其家に有ざる此好古、是非をヤも恐れ多く、過し頃身まかりつる天文の博士、加茂保憲が娘柳の前とヤ者、女あれ

共其家より育ち父が傳の片はしを、存せぬ事ゝ有まじと召つれたり、女おれば恐れも有まじ、召れて子細は尋有べうもやと、は免を請て呼つたふ聲をあるべよ、立出る、始めて上る雲の上、遥、女の氣も弱く、薄氷を踏でとくにて胸ゝうつせの襠姿おめず場うてぬ顔してもそゞろ、ふるふて畏る左大將佐見、加茂の保憲が娘榊とゝ汝よお、男子おれば親が遺跡勸る年藥傳へ知たる事有べ此度の天變急度考、善惡を包まず眞直に卜上よと仰ける、是ゝ恐れ有お詞、女の事おれば傳へし事ゝおけれ共兼々父上の門弟衆に、教へ給ひしをよそおがら承り置しが、一ッの眞丸お物を宙に釣て置べ、其丸い物に自然と東西南北上下も定まる、是を月日にたとへて、西ゝ天竺東ゝ唐、南ゝ日本北ゝぞとと分野といふ物をわかつて、諸事考るが先天文の手習、伊奘諾、伊奘冊の尊、天照太神を生給ひ、此子光花明彩六合の内よ照徹、天に送つて天上の事を授んと、天よ送りやり給ふ

是今日の日天子、當今朱雀の帝樣も同じと、又次ゑ月讀の尊を生給ひ、是も明彩さ日の神ゑ劣ず、日にあらべて天上の事をしらせんと、俱ゑ天に送りまつる是が今日の月天子、日の神にあらび給へば恐おがら東宮、櫻木の親王樣も同じと、此度の天災、白虹日を貫けば天子のお身の崇りあれ共、月の躰を貫きしゝ東宮樣のぼつゝ云み、下として上を侵といふ天道のお云らせあれ共爰ゑ一つのたすけがでざんす、廿八宿の星の内、女と鬼と申二つの星月の傍を離れず、女ゝおんあ、鬼ゝおにといふ字ゑて女の鬼ゝ悋氣の妬み、上をおかす禍とゝ申せど、國を乱し民を損ふ迄ゝあし、女中方の愼みで此禍ゝ、云あどの風の天の八重雲を吹拂ふ樣ゑ、さらり〳〵と消て行と云つたがましう申上る聞でんぽう、易ゝ變易ありとやらん申せば、女の及ぶ事であし、私の父天文の名を揚しも、唐土の伯道仙人も、金烏玉兎集といふ書を傳へ、近き君の守護と成、惡事を善事に

轉じかへし、兼ゝ其書を保名殿に讓らんとゝ申されしが、急病故に何の遺言もなく、館の内に勸請せし大元尊神の社ゝ其書を納め箱の鍵ゝ自扉の鍵ゝ母ゝ預け果られし、哀道滿保名の兩弟子の中、いづれに成共書を讓らばかゝる大事のゝ時の、役用ゝ缺じと憚なくいふ事いふてゑまひしゝ遁ゝ親の娘なり、六の君ゝ褥を轉び出給ひ、柳とやらんの詞のはし、此禍ゝ女の妬と聞も恐ろし身がちゝむ和歌三神を誓ひにかけ自が心に妬み嫉ゝなげれ共、ゝ息所の在せば、若ゝさもしい氣も有かと、人のさげしみ恥かしうお情ゝ忘れがたけれ共お暇を給ゝりて、尼法師共おしてたべ、父上おふと好古の袖に縋りて、泣給へばゝ息所も涙、おふ其云譯ゝ君よりも自が心が猶恥かしい、足下にお暇給はらば自も身をすべり、同じ庵の伴ひびやと同じく褥を出給へば東宮暫しとゝめ給ひ日來中よき程有て互ゝ貞女の道を守る、ゑはらしや賴もしや、何事も丸

が心よ有、無狀わさぺし云給ふおと、奥よすゝめ勞ゝらせ、女おがら榊が訴へ謂有、其道滿保名とゝ誰やらんとゝゝせ給へぺ、左大將さんひ、道滿とヤすゝ蘆屋の兵衛とヤ某が召使かひ、保憲が門弟の第一番、保名とヤゝ好古の家來、天文の稽古終に聞ず、子細好古に沙尋と、ヤ上れぺ取あへず、安陪の保名とヤゝ某が家來希名とおのりし者年來天文に心を委保憲が門人と成、師匠の保の一字を赦され保名と改めゝと、二人の訴へ詳よ聞し召、保名道滿、其業よ甲乙おけれぺこそ保憲が存生よ、いづれへを書ゐ讓らず身まかりけん、此上ゝ左大將の執權岩倉治部、好古の執權左近太郎二人立合大元尊神の神慮に任せ、いづれ成共神の心よ叶ゝん方へ、金烏玉兎の書を與よとの給へぺ、沙供に候せし岩倉治部左近太郎、階下にひれ伏畏る、治部太輔左近太郎とゝ汝よおゐ、四海の悅ゝ丸が悅丸が歎きゝ四海の歎き、是小緣の業ならず、必互の贔負を拒み、神慮よ違ふ事

あかれと入御あらせ給ひける、仰べ高き久かたの空に限りハあけれ共夫副爰に量りしる君が傍代こそ「打樂て、世ハ春あらし、青柳の、いと媚めける乘物ハ、加茂の保憲の息女槲の前、禁裡をさがり歸るさやつきく女中の取形も、公家と武家との間の町、急ぐ跡より（調ホライライ）暫しと呼に何用か誰人かハと傍よ乘物を立さすれべ、安倍の保名が草履取、與勘平息を切て走り付、一二町跡からちらりと目印、幸と顯げたのさける程聲かけたも、傍所の首尾ゑらぬ故無禮ハに免、此狀箱女中方お賴ゆとさし出そ文と聞より飛立ぞ人目の有べしと〳〵と、ホテ、いつもおがら與勘平太儀と斗とく紐も、しんくしんきの思ひ川ぬれあふ中の玉づさハ、逢近おらで逢事ハ、されお所が戀の味、文くりかへし讀終り誰墨すれ、ハイライと乘物お硯取出しさし寄れべ、思ひをこむる返しとお認めの間がお透かお笑ひ盛りが取卷て、（調ほんよ）〳〵けふハ（調）よい所へ與勘平殿、夫ハそふとい

つぞいといふ聞ふと思ふた、よい扨から世間よかいつた名いいくらも、有が中でこあたの名い與かん平とい誰付た、旦那樣の物好か但いとあたの望でが、譯の有そあ名じやなふと、黙頭合て問かくれば與勘平、居直つて、成程〳〵、拙者が名よい因緣由來、故事來歷、かる〳〵こういやされぬ事あれど、問人が問人ぞやお咄しやさふ元來拙者が名い勘平、旦那のお傍近く參る者幾人も有中に、天道三寶の冥加よも叶つたる、此通り無骨の身共とかく保名樣のお氣よ入、身よおつこやる事いお詞付が格別、どうしてくれいよ勘平、斯こてくれいよ勘平、肩うてよ勘平、足さすれよ勘平あどゝよ勘平〳〵と仰が終にいつとあく、與勘平〳〵と人も呼、我も又わる勘平と云ふまし、忝も尊くも、拙者が與の字い主君よりの拜領勘平に與の字の取付た始り、あら〳〵斯のどとくぞと語ればみあ〳〵打笑ひ、何咄さしても、口がる氣さくお主の氣に入與勘平殿、奉公する身

のあやかり者、アレお乘物から召まする、ヤイ　あい〳〵とさし寄バ、榊の前面
慚げに、コレ保名樣への冷かへし委しき事ハ此文箱、隨分早ふ冷出を、賴む
〳〵とこあたも歸り取急ぐ折からぞつと一ゑきり、土砂ぐるめ吹風ゑ、
保名の文も卷込で、空に漂ひひら〳〵、比良や横川の方ゟ吹天狗風
とハゑられたり、榊の前も氣の毒がり、あふ與勘平、アレ〳〵文ハ西へ〳〵と
行程に、歸りかけに落つく所、見届けて取てたも、人手に渡れバ互の大事
そあたゑ賴んだ預けた、とやかくと隙が入、ア、心せかれや乘物急げと仰
より、六尺七尺一またげ飛がごとくに行過る、跡につゝぽり與勘平狀箱
持て呆れ顏、ヱ、めつぽうあ當途もあい闇の夜に烏追やうあ預けもの、ヤア
ゑたが風もゑづまる、そろ〳〵狀殿がさがらるゝ、ヱ、まちつとじやと、子
供が蜻蛉つる同然、飛上り〳〵、ひよいと返りや高上り法度ひよろ〳〵
ひよんあ役目じやと文をゑたふて、尋行水上清き片淵や加茂の氏人保

憲の館、保憲死去の其後ハ、姫の養育髪切て後室殿と内外の、人の敬ひ持はやしよほとる悪事どうたてけれ、中の間よ立出姫共〳〵と呼わめき、（詞）どいつを見ても居眠たそふな顔付、榊ハ部屋よか上様へ上つたを、大きな顔で畫寢して居ぬが、皆手々よ棒でも持てさすり起せ撫おこせと眞綿よ針を包む折から、當家の執權人の皮きた乾平馬、お傍へ近く手をつかへ、（詞）舍兄治部の太輔様密〻の浄用迚ハ出あされしゝと、いふ程もあく岩倉治部太輔國行、のつさのさへり上座よつき、（詞）後室今朝の浄所の首尾、姫が咄し聞召つたで有ふの、夫に付密〻云たき事有て、左金太郎と云合せの刻限を待ず此通り、先是をお見やれと懐中の一通取出し、平馬を見よと投やれば後室取上押いたゞき、（詞）是ハ正しう保名が筆姫が方へ來た文是がどふして手にハ入た、されば〳〵某も何をあく、ふ闇眺る庭の松が枝よ何やらぴら付、又町の子供等が紙鳶落せしかと氣を付れば

此文、今日櫻木の親王樣いかゝ仰出されゝや、心元なく後程密よ參り、承り度存ます〳〵と、文よ子細ゝあけれ共元來淨闍といふ物が、ふり物のあぶな物万一保名に闍が上つてゝ、此方ゝ童の手を切たるも同然、どうぞ左近太郎と立合ぬ内此方へ、せしめる思案ゝ有まいか妹、平馬も智惠を出せ〳〵と氣をいら立のせゝしあし、後室さゝぐ色もなく、兼々お知あされた通り、此金烏玉兎集の事ゝ、夫保憲殿存生の内日を撰安倍の保名よ讓り娘を娶合せ名跡を續せんと、吉日を待内に煩ひ付お果あされた、そつとの所を運のよゝい、不仕合な安倍の保名、こなたやわしゝ芦屋の兵衞よ讓請させたいと思ふた樣に大事の所を遁れた上ゝの强い運、富てもぼ闘でも當るよ氣づかひあけれ共、廻らふなゝ近道と平馬と内證示し合せ、明にくい寶殿の扉や箱、明だが思案落ついて下されと、直簦内傳の玉兎集治部よ渡せゞ惜りし、是ゝどうして取出した、扉の鍵ゝ其

方が預りおれ共、箱の鍵ハ娘が預り兼て聞、大事にかけ肌身を放さぬ其放さぬを智略にて、盗人の隙ハ有ど守袋も寢る内ハ枕元へ忍び、鍵の寸法うつし取拵へし此相鍵、ヘヽア之たり〳〵、道治部が妹程有、出來たく有がたし忝しと押戴き、此書を道満よやれば、あれも出世此方も出世、出世だらけよい事だらけ此狀こそ幸、保名めを盗人にする仕樣も有ふうまい〳〵と悦べハ、其うまいを肴には酒一つ參らぬか、それハ耳寄兎も角もと馬の合たる平馬があおい、人喰馬ゑ間の戸を引立てこそ入にけれ、柳ハ我つかふ姦をいざあひよい隙と部屋を出、もふ刻限ハ何時ぞいハず共氣を付て小鳥共こゝへおぜ出さぬ、イヤヤお姫樣、けふハお前のお心ハ小鳥所じやゞざんすまいがあ、けさの淫所樣のお詞、千に一ッぱ闇が道満殿へあがつたら、ゞふせふと思し召ます、ヤア夫故早ふお出あされと文やつたれば、もふ見へるに間ハ有まい、お出を之らせのお鷹の爲

あをせといふ小鳥籠、小言いハずと早ふ並べいあいと手々よ持はこぶ飼て心の慰みと、人に見するハ鶯鳥よ、二人が中の、かたらひハ、末長かれと尾長鳥、朝夕爰に置まして見つ見せたさのかはよ鳥それ其鶲ハ伯父様の、秘藏せよ迎給ハりし、若保名様氣がそれたら、胸のひたきと氣が付て見るもいや〳〵捨ハあらず、遠のけてそちらよ置と得手勝手笑ふ口々囀る鳥、聲高塀の外面よハ忍びくる安倍の保名參議好古にみやづかへよせい有身に有ね共、先祖ハ遣唐使よ撰ばれ唐土よて日本の名を揚し。昔思ふも身の耻と編笠深く顔隱し忍びて爰に立寄ば、御供の與勘平鈴付し小鷹を手にすへ走付、お旦那あれ〳〵小鳥共が囀る、神殿お出を待兼と聞へた、此方もお鷹を使よしらせんと、拳を放せば飛上りもぢり羽もぢり羽毛をふるひ、鳥の音に眼を付籠をむんづとつかんだり、ヤレお出なされたしらせの鳥嬉しや〳〵妹共、鷹を與勘平に渡し小鳥共かたづき

やと、庭にかけをり裏門口明て招けべうをづいて、入と云めあふ手の内よ色と思ひを含せり、興勘平鷹をすへ、コレ、然中、拙者ハ人目有歸れと旦那の仰詣り歸る、コリヤ鷹よけふも又すくちむあはらてかへるあ、世間のたとへとハちがふていつ來てもく、鷹骨打て旦那のをじき、こらへじやうのよい鷹めでハ有ハいと小踊云てゞ歸りける、榊さゝやぎは所の首尾ハ最前文でヤ通、みくじといふ物ハ天道次第運次第、心に任せぬ神の掟云出せバ愚痴あと呵ら云やんすれど、とゝ樣まあ一年いきてゞざれバ夫婦にも成、書物をお讓りあさるゝ所をは往生、連の弱いお前あれバ、けふのは鬮も私が心にハ上る迄も氣づかひで、胸のおどりをコレ見さ云やんせ、頼むハ大元尊神吒枳尼天、早ふ呼寄まして禱祈念もさせませたく、左金太郎樣ハまだ見へぬに、伯父はハ先般來て奥よ酒盛、一ぱいと心がせき早ふお顔が見たかつた、サア一心に祈誓をかけおまへには鬮の上る

やうに、俱よ祈念ゝ怠らぬと力を付るぞわりあけれ、おじみあれば
そ添い、我も文を見るゟ沙鬮の善惡、すぐに生死と定めしがいやるを聞
ばそふでもおい、信有ば德有神ゝ正直のかうべにやどる、力をそへてた
べ隨分神慮をあふぐべし、といいふものゝゑぼし千早もかけずして、此
平服恐れ有何とせふ幸〳〵父上の素袍ゑぼし、わしが部屋に有取てこ
いあいと急げゝ急ぐたけ行より早く持てくる、ヲ、誠に〳〵目馴し師匠
の素袍烏帽子、今日着すると云ゝ吉、左右〳〵、冥加あれ保憲公と押いた
いき〳〵、着せんとする所へあたふた奥へ行女、何ぞとへば左近太郎
のお出故、ゑらせましにと走り行沙傍輩の中あがら、見付られてゝ事や
かましさゑだが部屋がよい所、いざとあたへと打連て裝束取持入にけ
る好古の執權左近太郎照綱案内させて座敷に通れば、治部太輔後室柳
乾平馬うや〳〵敷、八庫の机には鬮を乘兩人の中にすへ置て遙に去さ

つて畏る、是ハ〳〵照綱殿は同道と存じたれ共老足のはか行ず却ては面倒とそろ〳〵お先へ參つた親皇の仰とハヤあがら遠所の所ゟ苦勞千万是ハ保憲が後家は存の通拙者が妹、次ハ榊お見知あされて下されふ、いかさまは母子共名ハ承り及んだれ共お目にかゝるハ始めて、ヤさべ今日ハ保憲殿遺跡の定り嘸お悦びあされふ、ヤ何治部殿、みくじの次第を日の内ゟ親王へヤ上る爲あれべ、ゟ支度能べいざゟ闔をお取あされまいか、イヤ先お待あされ、仰のごとく今日ハ名跡の相續、未來の保憲も嘸大悦、迎もの事に彼金烏玉兎集を取出し、神前に備へ置其前ゟては闔を取べ、保憲直に讓る心、先書を先へ取出してハいかゝでざらふ、それハ兎も角もは勝手次第、アレ後室、左近太郎殿もは同心、扉を開くハそあたの役早ふ〳〵と有けれべ、母ハ清めのから手水注連縄ほどき立寄て、海老錠、ぴんと扉を開き、コレ榊扉ハ開いた中の箱ハそあたの預り錠明て書を

取出しは神前にお備へヤしや、あいと諾て去と〳〵と歩むとすれど氣ハ空よ、口ハ經やら祓やら只一時に一生の、年を寄たる浦島が明て悔しき箱共去らず、恐れみ愼み取出し二人の中に居置、鑰よてひらく箱の内見るかはつと驚けり、後室そしらぬ風情にて、何をうち〳〵してゐやる、彷兩所のお待兼早ふ爰へ持ておじや、アレまだいのおれに斗物云せだまつて居所じや有まい、合点が行ぬと立寄てヤアとりやどふじや太切あ家の秘書此中にでざらぬ、と聞て驚く左近太郎はつと溜息つく斗、治部太輔聲あらゝげ、ヤア後室、あいといふて事が濟か、兩人ハ鍵預り外に去らふ者がおい、詮義して身の垢ぬけ、左近も是にお居やれば兄弟迎容赦いあらぬ、一卷の有所いハねば骨をひしいで云す、何と〳〵と仕組の詞後室、柳が膝引寄、コレ今のを聞きやつたか、現在おれが兄弟でも容赦のあらぬお上沙汰、そもた迎も其通娘の遠慮成ませぬ、ヤア誰に盗んでやりやつ

たぞ、是ハ母様のお詞共覺へぬ、わしが盗んで誰にやろ、イヤやりたがる其相人も此母が睨で置た、たけ〳〵ゑふいやつても盗んだハ慥〳〵いやとハ云さぬ、肝心ゑまりの中の鍵ハそあたの役、緩令外におろした錠の相鍵ハいつでも仕やすい、大膽お相鍵してよふも目をぬいたお、有やうに云ぬと骨をぼき〳〵折ていハす、サア、ぬかせ出しおれと腕まくりする佐相に榊ハとかふ泣斗さしうつむいていらへおし、サア後室手ぬるし〳〵、引く〳〵つて鴨居へつり上、白狀さするハ治部が得物、そこのかれよをひしめく所へ榊が部屋より平馬が高聲同類を捕へしと、保名が胸ぐら引立る是ハ難題狼籍たり、放せ〳〵も放さぺこそゑぼし素袍も引ゑやあぐり、座敷へどうと打居れバ榊ハはつと胸ふさがり、左近太郎も一座の手前顔色かハつて、コレ保名、かハつた所で對面いたすけふをいつと心得て此所へハどうしてきた、忝くも櫻木の親王、保憲が跡目相續の佐差圖

戸屋兵衛安倍の保名伽藍鐵の闇に任せ秘書相傳ゝ時の運、弟子と弟子との立合ゝ後日の心よからじと、傍賢慮をめぐらされ治部殿と某二人が名代左近太郎が闇取氣づかひで和殿ゝきたか、親王の傍下知背くといひ主人小野の好古卿、顔迄よごす不届き者サア言譯せねば左近が立ぬ、性根定めて返答有と、理の當然よ差付て、云譯あらぬ身の誤り戀に心を苦しめり、治部太輔せゝら笑ひ、保名のどろめと道滿と同日よいふも勿躰ない、遠治部が聟程有て潔白に身を守り、こんな所へ出えやばらねば盗人といいるゝ恥もかゝず、自然と極る師匠の後胤闇取も絲瓜も入るいヤコレ後室誰よ遠慮してお居やる、どれ合めらを詮義して卷物を渡されよと、己が盗取あがら人を彪る欲面兄弟、後室保名が襟首掴み引ふせれば柳の前、是あふ暫しと寄所をエ、面倒な邪广めらうを、髻を片手よ二人を念付、ヤイ恩知ずの罪人めら、師匠といひ親といひ目をぬいてくさり合

訃の報ひゝ早い物、おれが產だら斯ゝ有まい、元をいへゞ和泉の國信太の庄司に賞ふた娘、あさぬ中とわけ隔繼子根性親くらひ、日來かゝいがる此母をよふ皮に云おつたな、儕ゝ又過行れた師匠の名乘の一字をもらひ、ゝ結構なお弟子殿、死れた夫を讒云やないが、娘よあまいあほう故修羅の種をつくらする、ゝ、よつくいやつ原腹いせよとあでり情をあら拏、目鼻も分ずぶちふせしゝ地獄の呵責目下、閻魔王に親有ゞお袋あゞゝ云つべし、榊ゝ涙せきあへず恥かしさを疑ひ、ちいさい時よりお世話にあり誠の親より百倍の、恩をあだに思ゝねゞゝからぬ今のうき難義、保名樣に科ゝあい盜まぬ云らぬいひわけにゝ、此身一ッを兎も角るお心はらして給ゝれと泣詫るこそせつなけれ、ゝ、是身の云譯よゝ及ゞぬ、來るまじき此所へ參りたる保名が不運、おぼへあき身の打擲も師匠の連合手向ひならず、好古卿への面晴保名が家名ゝ汚るゝ共、五臟六

ッ腑ハ汚れぬ腸引出して中譯、介錯頼む左近殿と指添ずハとぬき放す。其手にすがつて榊の前及物もぎ取あむあみだと、喉にがハと突立るコ早まつた生害やと、保名ハ、仰天照綱も呆れ、果たるバかりに、手負ハくるしき、氣を取直し早まりしとハおろかの仰、よしなき戀につながれて云わけたゝぬは切腹、そをやおくれてあられふか、母様も伯父様もは不肖あがら聞てたべ、弟子の中よも保名様、氏といひ器用といひ、そちと娶合し末ふハと、の給ひし事もあつた故、父のお詞にあまへておふたりの、目顔盜みし母の罰、天罰といふ物にや沒さよを歸りの道すがら、お前からたまひしふみ俄風よとられしも、今別れんとの去らせかや玉兎集の行がたも、推量ハ去つれどもぞふも、〈いハれぬ相手、清き心ハ天道や神はとけを證據にして、去んで行身がいひ譯名殘おしの保名様、左近様顱み上ますと聲も涙もせり詰し、此世の苦患四苦八苦及の氷名殘の霜消

てゝかゝく成よけり、保名ゝ死骸よ縋り付前後ふかく歎きしが、元來正直つきつめたる胸に思ひの氣も散乱、むつくと起て、ぼゝ、ぎゝゝゝ、こりや目出たいぞふもいへぬ、ゝゝゝゝ、面白いと正氣失ふ高笑ひ、左近興さめコリ保名、照綱ゑやが覺へて居るか心を定め取直せと、制すれば猶きよろ〳〵聲、よしや世の中死だがましかいの、生て思ひをコリャよい〳〵、ゝゝゝけら〳〵笑ひよ一座もうろ〳〵、治部太輔庶氣味悪く立ゑはあけれぱぶつてう頻コリ、一人ゝくたぱる一人ゝ違ふ氣違ひの守ゝ左近太郎詮義して歸られよと、行を引とめヤア是詮義が殘りヤた事相濟迄先待れよ、イヤ其元ゝ若役老人が義ゝ容赦、ゝれやれけふゝ惚りの仕つゃけ、それ故か腹もがつくり、年寄と紙袋ゝ入にや立らぬ、内へいんで入ませふと盗み取たる卷物を腹よかこつけ立歸る、ゝゝゝいぬるゝ〳〵、おれもいの、ヤ何ゑや、獨ゝいおさぬ、何のいとしいそおたを置て獨ゝ行ぬ、ヤアお ゑやたゝゑよと榊

がうちかけ花ずり衣、茶の玄げ縫乱菊の乱れ心やみだれがみ、肩に打かけくるく〳〵、くるひ出るをやらぬと、とむる平馬をふみ飛し縋る後室、取てなげ、はり退、ぶち退、戀に苦しむ戀の仇、戀しき人ゝ殺されても、戀々妻のこい中ゝ何の離りよゞしゃほんよ天ゝひくそう、ひそう比翼の鳥のくち〳〵、地ゝ又あらくの底も離れぬ連理の榊さかき〳〵と逆上る、狂人くるへゞ不狂人、左近太郎がとゝむる袖ふり切〳〵くるひ行戀路よ迷ふ子ゝかあけれ、乾平馬仕すまし顔、佛もあい堂よりでざらずと左近殿もお歸りといゝせも果ず飛かゝりそつくびとらへもんどり打す、後室猛つてとりや狼藉ぞふ仕やる、狼藉とゝ聞ゞら、盗人のゞけ顯ゝれた是を見おれとさし付る、ムヽ夫ゝ榊が預つた鍵、ホヽ榊が鍵ゝ今一ッ爰に有、盗人婆めが立まふ内おとしおつた此相鍵よふ榊を殺したなァ主從共よ猿つあぎは所へ引腕廻せと、ねめ付られて二人ゝわな〳〵逃支度

する所へ息を切て與勘平、奴來たか〳〵、あい〳〵内證臺所で女中ゑ聞たゑつくいばゝめ、保名樣のは名代きやつゝ拙者に下さりませ、チ、兎も角もと拔放せゞ平馬も通れぬ死物ぐるい、二うち三打かあゝじと奥をさして逃て行、婆が首筋奴が片手きやといゝずとにやんとあけ、猫また婆めが成敗ゝ是よ〳〵此注連縄、明た扉の上にかた〳〵引ぽどゞ、首に纏へゞ刎廻るのら猫古猫する〳〵蹄縄先左りの手ゑからまき、ちよいと引ば七顛八倒ぐつと引ば目玉もぐつと、ぬいて取たる一ぐゝんの報ひゝ目のまへもがき死心地よかりし有さまあり、左近太郎ゝ平馬を追つめてうと打たる太刀かげに、首ゝとんでからだゝ乾猫とあらんで死てけり、コリヤ〳〵奴保名に早く追付て、子細を語らば正氣に成べし急げ〳〵あい〳〵と別るゝ跡へばら〳〵〳〵、取まく下郎うんざいめら、あぎたて切ふせ殘黨共むら〳〵はつと退ちらし、心ゑつかに刀を納め、出ゆく

武士に仁義有奴に過た忠義あり、歸りし伯父に詮義有、死たる娘よ不義あれど戀にゝゆるし有明の、月の都に照綱が武勇の、譽れぞ世に高き

第二

大おゝる者の已を立るゝ奢の基ひ、此字をわくれば一人の者と訓ず岩倉治部太輔主君左大將の仰を蒙り保憲が秘書を首尾よく奪ひ、己が館に預り置邪智を廻らす折こそあれ、兼て密事の相談よゝ河内の國の鄕侍石川惡右衞門角前髮の部屋住おれ共、惡に馴たる、强氣の若者招ぎに應じ入來たる、跡に續いて芦屋の兵衞道滿舅の館案内に及ばず、一間へ通れば治部の太輔出向ひ、よくぞ〳〵　兩人、今日ゝ左大將殿諸共密々の相談おれ共、主人ゝ大内の御用よよつて沒不參、某が諸事承りて申談ずる子細有、ヂア〳〵是へお通りやれと挨拶すれば惡右衞門、遠慮もおく上座よおをり、ゴレ〳〵道滿殿かたい〳〵、聟舅の禮義ゝ常かやうの時の相談ゝ額

と額すり合されバ談合がおそかぬる、但しお手を取ヤさふか、いかにも
ほ意に任さん御免あれと、三人鉄輪よ膝組合せ治部太輔小聲に成、扨兼
々も云通り、保憲が家の秘書、金烏玉兎集道満保名兩人の弟子の中へ、神
慮に任せ彼書を讓り、天文陰陽の兩道をつがせよとのほ事、万一保名に
彼書が渡らバ、好古ハよからふが此方の旦那ハ大望叶ハず、聳道満の殘
念も推量せしにサアちをも有バ有物、妹後室が相鍵の働きで首尾能うば
い、榊がいたづらの文を拾ひ保名に惡事をぐハらりとぬりしが、不便ハ
妹の後室人手よかゝり相果、姪榊の前も其夜よ自害と聞て道満をはつ
と驚く斗ゝ、惡右衞門ゑやくり出、知た保名が所爲、治部殿詮義あさ
れぬか、ヲ、身共もそふハ思へ共、さやつも夫より行方ゑれず、此詮義も打
捨置捨置れぬハ奪ひ取たる玉兎集、早速主從打寄内證て讀で見ても、ち
んふんかんよて合點行ず其方とくと此書をそらんじ天が下の大卜師

とあり、主君の望み叶へよと件の秘書を取出し渡せば道滿飛ゑさりうや〳〵敷手にさゝげ日來の願ひ今日成就是も偏に主君の厚恩忝しと紐をとく〳〵押ひらき、一ゝ拜見し横手を打、ハて、保憲のおしまれたる道理〳〵、荆山の伯道が傳へし、天地陰陽の歎曆筭推歩の術迄も掌をさすがごとしと、押いたゞき押いたゞけば惡右衞門肝を潰し、扨も妙かな見人に見せれば又格別、あかりをはゑる芦屋殿と云たり顔に悅ぶにぞ、治部太輔をつぼに入、早速あがら尋ふゝ、主君のは息女は息所櫻木の親王のは胤を孕懷胎のは子もあし、何と其術も有あらば、一行聞たしときはひかゝれば、ハて、積善の術ゝおこあひやすし、毛色白き女狐の生血を取、御息所の寢所の下陽に向ふて土中に埋み、叱枳尼の法を行へば、若宮懷胎疑ひあしと、聞ゑ悅ぶ治部太輔出來た〳〵、イヤできゝ出來たがあんと惡右、狐のさいかくぞふせふぞ、夫ゝ氣遣ひあさるゝあ主君の領分石

川郡、其外五幾内狩廻さゞ白狐の五疋や十疋ゝ、手の中に覺へが有それあらゞは懐胎ゝ案の中爰に一ツの難義ゝ六の君親王のは寵愛他にこへたれゞ自然きやつが先へ孕むと、外戚の權威を好古にとられ主人ゝ有てあかし物所詮邪魔ゝ彼めろさい奪ひ取ふと思へ共、大内のまもり嚴しく盜出すに時節あし、彼俗説に、蛙の背に思ふ人の名を書て、敷居の内へはりこめゞ必出るといふ事、古き書物で見たる故其法を行へ共、驚程も聞ず頃日ゝやる呼出し病ひも六の君にゝ取つかず、たそやたその歌の法にて疫病の神もたゝらぬゝ是がはんの臆病神、あんと彼書に呼出す法ゝあい事かいかに〳〵と問かくる、有共〳〵、六の君をおびゐ出し其上のは思案聞たし、されゞ奪ひおはせあゞ長ふ邪魔をひろがぬやうに、ぶち殺して仕まふ合点、其術頼む聟殿と人の譏も白髪の親仁、俱に腰押悪右衛門扨ても妙計殺すとゝ手短あ上分別とそゝりかゝれゞ

返答もせず膝立直し是ハ又舅殿の詞共覺へず、主君ハ子故の闇よ悪行を募らるゝ共、そこを鎮めるが執權の役ゝ息所ゝ懐胎の祈禱あらば、非常の大赦か生るを放つ善根こそ、汐願成就あるべきに是ハ正しく六の君に非業の死をさせ罪につみを重ぬる上ハ、七鬼神の責を請ゝ懐胎存じも寄ず、天に口有地よ耳有好古あぞへ聞へあゞ、安穏で置べきか時にハ却つて不忠の至り、此謀斗ハ無用〳〵といひはぐせゞ、汝が一言能推せり、イヤ拙者ハお爲を存じての諫言、イヤサ諫言だておけ〳〵、察ずる所好古が家來左近太郎よ、おとが妹花町を嫁にやつたる故、一家の主と敬ひ六の君をかばふのか、それハ舅殿の廻り氣、イヤサ疑ひ請るも胸一つ骨折て奪ひたる玉兎集も娘築羽根も取かへし聟舅の縁を切、お家の大事を妹よ見かゆるふ所存左大將殿へ申上、今日に物見せると立を引とめて是〳〵妹あぞが縁よ引れ不忠を存ずる道滿あらず、サアそれあらば只今術

をおこなふか、あんと〳〵ときめ付れば人の命を斷事ハ陰陽道の禁めあれ共、鼻の疑念を晴す爲と硯引よせ、呪咀の文をゑたゝめ、此神符を六の君の住給ふ北の門の礎が、三尺六寸四歩去て張付る、則三百六十四爻の占此寸尺よりとゝまる、北ハ坤の卦向ふてはるハ乾の卦、是陰陽交躰天地未分の一ツ、迷ひ出るよ疑ひあし刻限ハ酉、うばひ取よ利有去あがら惡事千里、愼みが肝要〳〵　何國で殺すは思案ぞ、それハぬからぬ都放れし浮菩薩地ハ、究竟の、ハめ所底も知れぬ池水へ、石をくゝつてずぶ〳〵何と〳〵ゑたり〳〵　面白し其役ハ此惡右衛門、奪ひ取て去づめにかけん、首尾よふ仕謂せあば治部殿兼々賴置、伯父信太の庄司が所領某拜領仕、彼が娘葛の葉を拙者が女房にくれる樣よ、元方卿の權威よて仰付られ下さるゝお執成賴むぞや、成程治部が呑込だ必ぬかるあ仕そんずあと、神符を渡せば受取きうあ所へ取交て仲人やら所領やら掴み頻ハる

鷲鵰烏丸通り櫻木の仏所をさしてぞ、げふこずべ、あすいちり行、よその風、仇ある花の名にしあふ、櫻木の親王の淨所の築地を洩出る、琴の音色も媚めかし、彼櫻木の仇花をちらして退んと入相の鐘を相圖ゑ石川惡右衞門刀ぱつ込裙をきりゝと短夜ゑ、せけべせく程たへ間もあき人通り、見とがめられじと或いあらいれ或いかくるゝ星明り、ちらり〳〵とちらめくゑぞ戀とや人も咎むらん、上の町より小提燈ぶら〳〵來る二人づれ、こりや叶いぬとかたへゑ忍べべ立どまり、何と出ぬぞや出ぬ共〳〵、こつちの目の出ぬにあつちのよいめの多いので、ふ斷一六すゑられいつのおりはか勝利を得ん、今夜いいんですで〳〵と双六より寢たが勝と、つぶやき通れべ、さいさきわるきやつばらと、行過る迄見送り〳〵用意の神符取出し立寄後ゑ又人聲、はつと驚き立退べ聲高々、名譽ふしぎゑ吸出し、痃癖や腫ものに此膏藥を張付れべ奇妙〳〵と賣て行、

辻占よしと堅横見廻し人跡たゆれば、六の君の住給ふ北の小門にイみ、道満が教へに任せ懐中の曲尺取出し、一尺二尺三尺六寸爰らが一歩と、目分量に神符を張付築地のかげよ身をひそめ今や出るを待居たる、かとつ恨みん皆まと、たへし、あふせのうき中を、いつそいんぬも、身一ッの物にさそれ出るとん、思ひがけあく六の君、裏の小門をそつと明氣を空蟬のもぬけのから、お傍の女中んそれぞ共をらず爰らべる琴の糸、ふみを爰のぷのゃわ爰や大江山、いまだ、あらんぬかちんだし、立やすらひておんします、時分んよしと悪右衞門築地の蔭よりぬつと出れば六の君、あにかあしやと聲立給ふを引とらへ、おど骨立おと握り拳をさるぐつん、爰てやつたりと引かたげば菩薩が池へと「急ぎ行石川や蟬のおがんを横ぎれに息つぎあへず悪右衞門六の君を肩よかけ、目ざすも爰れぬ鞍馬口憑あらぬ欲のふかみ草、廿日亥中の月爰ろも、東の山にあかね

さず、それを力の、目覺によく〳〵すかしてみぞろ池こゝおんめりと、ぞつかとかろせば氣もきへ〳〵、これそも誰おれば情おや、身に覺へもおき事にかゝる憂目を見するぞや、赦してたべと泣給ふ、詞めろ〳〵とやかましいぞちめらうにかゝつて此侍の形を見よ、都から此池へもゆつくりと一里半、かち荷持同然で肩も足も草臥果た、暫く息をする間合掌して待ておれ、是究竟の床几でざめりと道玄るべの立石よ腰をかくればおふ武士おらば物の哀れ玄る筈、たとへいかやうに成迎もいとゝぬ、斯々したいりわけとたんおふさして殺してたべ、詞、われが此世に長居をすれば息所の邪广よ成故、此池へ沉めよかけて殺すの玄や、ヤア扨ゝ息所の云付でか、妬玄つとゝ女のおらひ、とゝ云おがら殺さうと迄ゝ思いぬにェぞうよくおむでい雛面人心とかつぱと臥て、泣給ふを取て引ぶせ、詞あまければつき上りめんだうお悔言と、あたりの石をひろひ上裾

よく〳〵り袖に捻込押込にぞ、あふ悲しやと取付給ふ糸ゟ細きよい腕へしわげ、やつと任せと摑んでさし上、池のふかみを窺ふ折から、汀に茂る葦原ゟ、よよつと非人の大男とんで出、悪右衛門が腰さえつたりとけかやせべ、うんとのつけに反かへるを、又引かつきぞふどのめらせ、つゞけふみよぼん〳〵と、踏付られても強氣者よろぼひあがら立上り、推参成乞食めと、えがみ付を身をかわし、ずつと、えづみさまたにかけ、かる〳〵と引がつきそこよ、爰よと持廻り青み切たる池水へざんぶとこそ打込だり水をくらふてあぶ〳〵と浮ぬえづみぬ漂ふ間に、六の君の浄手を引蘿打はらひいざ、召給へと脊中さし向負奉り、足に任せて一さんに行方えらず「成よけり、昔より爰に和泉の神がきや、信太の里に年ふりて蘿に交いる宮、柱和光の影も明らけき是も神の誓ひ迎、つき〳〵迄も當世のかゞ菅笠を一やうの鄙よめあれぬ取形の、葛の葉姫と聞へしい信

太の庄司が深窓に、ひとゝおりたる秘藏娘、心に深き立願の歩路ひちふて神詣、千早振袖襠も都に希お北形花も色にや耻ぬらん、外めづらしき女子共、ヤ〳〵姫君様俄事のお供よて我々迄も氣ばらし、そもアけふの產宮詣ハ何のお爲とはのめけば、ヤ〳〵語らねば知ぬも、尤、頃日ハ毎夜〳〵血筋に離るゝといふ心がゝりお夢見る故、都にまします姉榊の前様の身の上よ悲しい事ハ有まいかとそれ故の神參り、皆も俱々願込してたも、頼む〳〵と曹輩を、思ふ心ぞやさしけれ、お前の其兄弟思ひ神も納受遊ばさいでハ、それハてつきりさか夢庄司様の甥の殿、石川惡右衛門様といふ獨角力見る様お、にくてらしい前髪がお前よきつい惚やう、お嫌ひおさるゝ程しとりかゝつて女房呼ハり其惡右衛門様よ放るゝと云夢の告、お悦びおされませ、ヤ〳〵、よふこそ祝ひ直してたもつて嬉しい、ヲ人に思ひ切るゝハ此上もおき悦び、追付爺様母様もお出の筈、それおらば

待合せにいつしよに伊參詣、此間に散殘る花をに覽もお慰と手々よ敷や毛氈の朱い都のから錦、打こんじたる女中の遊び皆々幕にぞ「入にける

小袖物狂ひ

戀よ戀、我中ぞらにあすな戀、こひ風が、きてい、たもとに、かいもつれ、思ふ中をば吹わくるあら、心あの嵐よつれて、うら吹かへす筐の小袖、見るに思ひのます故にこそくるいすれ、くるふい誰や、我いそも、安倍の保名がやすからぬ、胸にせまりしかず〳〵より、いづくをさしていづみぢによるべの水もうたかたの、漂ふ姿乱髪素袍袴踏ゑたきうかれあるくぞ、たゝあられ、是々物といふ、若其あたりへ十八九の娘のかいとりづまで、ゑあら〳〵と行ぬか、ヤア〳〵ゑらん、チ、其尋る人こそ、芝蘭芙蓉の花の顔ばせ姿い物が、およびあき、よしのいつせの、薄櫻、さらゑあ越路の月雪も、あが

めいはるか下照、衣通、神のゑにしのさかきとい、我戀人のあだし名か、あだあ契りに云かいしたる言の葉を思ひやるさへ悲しけれ、ふけ行かね別れの、鳥も、ひとりぬる夜い、さいらぬ、物を、榊の糸の乱れ心いつ、いつ忘れふぞ、いつのはるか思ひそめけり、ア、去年の何月幾日やらヲ、それよ、いあのゑんや、はあの縁、てら〳〵の鐘つくやつめい、にくやあ、こひ〳〵てつまれよあふ夜い、日の出る迄も寐やうとすれど、まだ夜ぶかきよどん〳〵、こん〳〵〳〵と、つくよまだ寐られず、寐ぬ夜恨みの旅の空、よさのとまりいどとがとまりぞ、草を去きねのひぢまくら〳〵、ひとり明すぞ悲しけれ、〳〵葉ごしの〳〵幕のうち、昔こひしきおもかげや移りがや、其俤よ露はども似た人有ばおしゑてたべ、おちこち人に物といんヲイ〳〵とまねげば招ぐ輿勘平やう〳〵に走り付是い〳〵正躰あき旦那の有さま、人の見るめも耻給ひ、ナア お歸りといさめすかしてひく手をはらひ、

かしてよゑゑげる榊の枝よ、かたみの小袖うちかけて、あれ〳〵、えだに床しき人ゝ見へたりうれしや迚、よぢのぼれゞさかきの枝ゝ身をとふし、あいぢやくゝ胸をこがす、こゝそもいかにあさましやと詮かた涙よふしゑづむ、こゝおさけおきはありさま、心おき草木をこがれ給ふもまよひのそら目、何そらめとゝ事おかしや、心あれゞこそ時をたがへず それそこよ、どれ、どこに、ゑん芝つ君にあひたくゞ、ゑのだおるやしろよあゆみをはこびて七日おん〳〵なゝよさ、こもらゞは利生まさしくあらたに、戀しき人よゝ、あひも見もせめ中に殊更榊の枝に、君が小袖を打きせきせて、まがふ方おき榊の前非情とゝ與勘平、ナイ〳〵汝こそ草よ木よとかたみの小袖身よ添ておいつわらひつさま〴〵に狂ひ、乱るゝばかりおう、始終幕の物見より、覗き見とれて葛の葉ゝ賤しからさる都人、何故かゝる乱心と幕ゑぼらせて立出れゞ、姫を見るゟ狂人ゝおふあつか

しの榊の前と、いだき付んと立寄をつき〳〵の女押隔是ゝ麁相せまいぞ、あなたゝ覺へをない事をめつそふな氣ちがひ殿、それとめさつゝやれ奴殿、いやとめておりまするお氣づかひあされまずな、語るも主人の聟なれ共一通り聞て下さりませ手前の旦那が思ひ人ゝおくれ給ひ、それより正氣取乱しに覽のごとく物くるひ、其戀人にあなたがとんといきうつし、直な目にさへ見ちがへるに乱心でい尤と沒了簡重〳〵卵たお願ひなれ共こがるゝ人に似た姫君優しきお詞かけ給ひそみ安き人心、自然狂氣も鎮まれば此上もなき慈悲心、お傍の女中お執成とよぎなく頼めば葛の葉にい、まだうらわかき心ないらへなければ姫君のお詞で、あの氣ちがひが直るならばそれいきつい善根見れば見る程よい男戀故と聞きや女子氣い、かたむき安き否舟のいなにい有ず葛の葉も、それがゝあられもない、ぞふいふてよからふやらと耻しながら立寄

て、懇しう思し召方がお果あされて、狂氣とゝおいとしぼやゐ笑ゐや、世
みゝ又忘れ草も有あらひ、お心取直し最早お歸り遊ばせと、いへば保名
も心をさづめ、よく〳〵見れば榊あらず似たりと思ふ執若ゐ、連て心も
正氣と成面目あげに指うつふき、さばしたたへもあかりしが、やう〳〵
に顔を上、與勘平、おれゝ正氣に成たるぞヤア扨々嬉しや忝や、是も偏ゐ
あなたのおかげ、お禮〳〵と主從手を下悅ぶにぞ、葛の葉も面ゝゆばに
田舍育の自が、ちよつとお詞かけた迚お心の治るとゝ、ホ、、、、チ、恥しと顔
を赤め、早速あがらちとお尋ヤたいゝ其お小袖、自が慥ゐ覺への有摸樣、
今又おつさやる榊とゝ、もし加茂の保憲樣のヤ、其娘の榊の前、ヤアそんあ
りや私が姉ゐと聞に保名も聞及ぶ、信太の㐂息女、葛の葉殿か是ゝ〳〵
と驚きしが、拙者ゝ榊の前と深ふ契りし安部の保名、と聞ゐ今更よそあ
らぬ姉の噂に驚かれ、頃日あしき夢の告ゝ、榊ゐの身の上かお果あされ

しいり譯を、聞せてたべと取付べ、ま、聞度ゝ尤おがら、爰ゝ往還人めも有幸の幕の内寄細あれよて咄し致さん、此上ゝ妹ぼを榊と思ひ神かけてと、目元でえらべ詞さへ岩木あらねべ葛の葉も、ほころびやすき幕のかげ伴ひてこそ入よける、女子共口々よ猫よ鰹の幕べいり、假令姉聳あれべこそ、手放してやられをする、さつきのやうよ狂氣あらべ、かんさへて汕斷があらぬ、是に付ても兎角手扨ゝ奴殿、當座の氣轉で戀の乱心しづめるとゝ、家原の文珠も及べぬ智恵、殊に名迄才覺らしいかゝいらしい男やと、せおかをとんと與勘平、旦那の狂氣此來ゝかゝいらしいにとり果た、おふいやゝ勿躰あやと幕のこかげへ逃込折から、信太の庄司夫婦連私領の内ゝお氣さんじ、供人かるく娘をえたひ是も社へ詣でくる、付々の女さし心得、親旦那おふた方御參詣としらするにぞ、幕絞らせて葛の葉姫姉の小袖を打かけて、只其儘の榊の前と、紛ふ斗の詰袖にて思ひ

宵ぢに立出る、娘の目馴ぬ取形よ心を付れば母樣、此小袖見覺へてどさりますか、どれ〳〵とよく〳〵見て是を去らいでよい物か、此母が若盛りに物存みに縫せた小袖、筐に見よ迎姉の櫛に送りしが、そなたゝどふして着てゐると父諸共にふしん顔、されば此小袖に付、悲しい咄しを聞ましたとわつと叫べば父母も、心あらずとゝいかに樣子ゝいかにとゝへど答へも泣て居て濟事か、と夫婦いらてば保名見兼て幕の内よりずつと出、チ、は兩親のはふしん、尤拙者ゝ加茂の保憲が末弟安倍の保名、浮息女櫛とゝ兼て夫婦の約束、後室の惡心よて家の秘書を餘人に奪ひ取れ、加茂の家斷絶といひ、夫婦の義理よ櫛の前ゝ其夜に自害、某も無念骨髓にてつし、夫より物狂ゝしく成思ゝず當所をへめぐり、各には目にかゝるもふしぎの緣と、語れば母ゝ聲を上あふ葛の葉、比日の夢咄しかほどよもあふ物か、是も夢共あれかしと身を投ふして、泣しづむ父ゝ道

に得泣もせず胸迄せぐる涙をとゞめ、扨ゝ聞及ぶ保名殿か、姉が此世よながらへ居バ、いかめしく聟舅の名乗合も致すべきよ、悲しきけふの對面老て子よ別るゝ程、至つて悲しき物ゝあしと、老の涙にむせびいる。ゆゑに歎きゝ尤あれ共、葛の葉殿がましませバ姉とおぼして慰み給へ、只今ゆゝ異あ物あれ共、榊よおくれ世よ便りなき某、何卒汐赦しを承り妹汐を、婦妻よゆ請たき願ひと聞もあへず、成程世間に有あらひ、あれ共一つの難義ゝ身共か甥石川悪右衛門、葛の葉を望め共、娘も嫌ひ殊よ又、禮義知ずの悪黨者故返答をせず捨置ゝ、急にあつ共ゆされず老の返事も尖ばよ、にべもなやくりも嵐よびゞき貝鐘の音せと皷間近に、森の方ゑも年經白狐のかけ來り、葛の葉保名が眞中へ、助てくれといいぬ斗りにかくれ入、よめた、今聞へし貝鐘ゝ狐狩飛鳥懐に入特ゝ狩人を是を取ず、殊よ白狐ゝ妖物よて唐土よてゝ阿紫とあづけ、我朝にてゝ專女汐前、

宇賀の御魂の神使にて、恩を知り怨を報ふ畜類、助てやらんと傍なる祠の扉押ひらき、抱入れば嬉しげゑ四足をひそめかゝみゐる、時に向ふの堤傳ひ眞黑に成てかけ來るゝ、紛ひもなき惡右衞門逢てゝ邪广と慕へ保名ゝ、忍びゐる、程なく石川惡右衞門人夫引連件の白狐を見失ひ、きよろ〳〵眼ゑ成てはせ付、是ゝ〳〵伯父者人、一家さらへて花見か遊山か羨しい、拙者ゝ右大將の仰を請近國を狐狩、同じ御領を預つてもてあたゝ仕合せ、妻子を引連あちやらるゝ去ながら、葛の葉を嫁にもらへば聟ゑ甥ゑ、舅のかゝりに二人前の働き氣づかひ召るな、見付た狐も取逃しゑんわるふ思ひしに、願ふ所の女房がり、けふ一日ゝ休にして、連歸つて腰膝擦らせ、此間の草臥休め、葛の葉お玄やを立寄庄司中に立ふさがり、下〳〵の婚禮でも吉日を撰むが身祝ひ、いかに一家あれば迎娘も得心せぬ事を踏付た仕かた、彼ゑもとくと合點させ、其上の事といひもあへ

ぬよ、おかれい、今度に限らず嫁入の催促い度〻あれ共、膿だ物が潰れた共一言の返答せず、又ぬつくりとつまふてや、もふそふ〳〵いだまされぬ、逢た時ゑ笠ぬげ、ゑやそれ家來共娘を引立、かしてまつてせこの者ばら〳〵と立かゝる、無躰いさせぬとさゝへる庄司夫婦をば、首筋、掴んで尻居に捻すへ、めつぱうやたらにあれだすにそ保名主從たまり兼、幕の中方とんで出葛の葉親子を後ろにかこへば、俤い安倍の保名、出來た、姉がくたばつた故妹をせうに來たか、ゑたい儕ゑい詮義の有やつよい所で出くゝした、加茂の後室殺したも慥にきやつ、それを引込伯父い同罪、信太の家を斷絶さして此惡右衞門が、押領する、毛二さいめ姫を渡せとおつ取まく、いや身に覺へもおい事をさま〳〵とはざいたり、コリヤ〳〵奴、爰い保名が請取た汝い各〻供せよ、隨分ぬかるな急げ〳〵、畏つて親子を伴ひ立出る遁さじやらじと惡右衞門、家來引連かけ出すを

どこへ〳〵と立ふさがり、伯父よ手むかふ無道人悪右衛門といよふ付た、あらゞ通つて見よ、いやめんだうあ蚊蜻蛉め、先きやつからぶちのめせと一度にどつと寄やつばら、取てゝあげ〳〵向ふやつをおとがい蹴上、左右方へかゝるを飛ちがへ刀の鍔にてすかうべ砕き、手をつくして働け共ついに大勢おり重おり、手取足どり四方へ引ぱり、上つおろしつ子供遊びの亥の子餅、二三度四五度もんどり打せ、邪广ゝ拂ふたる葛の葉を奪ひとれと跡をえたふて追かくる、保名ゝ又躰も砕くる斗手足もひしがれ目くるめき、苦しき息をはつとつき、儕悪右衛門、生て帰さじ比興者かへせ〳〵と立上つてゝ、どふど轉び、よろぼひ立てゝかつぱとふし、無念〳〵と歯かみをおし男泣に、泣けるが、必定葛の葉も奪ゝれつらん、最早いきてかひなしと指添逆手に拔はおし、既に最期と見へける折から何として遁れ來りげん葛の葉それと見るよりも走り付、是

待た早まるまいと聲かけられてふり返り、こあたゝをふして來た事ぞ、兩親ゝ怪我ゝあいか、はて親達ゝをふあらふ共お前よ心ひかされて鎬の中を來た者を見捨て置て死ふをゝ聞へませぬと喞つにぞ、保名も始終をつぶさよ語り扨危き事かな、と互にいだき組り合わりおき妹脅と成にける、かゝる所へ與勘平息を切て馳歸り、各を供して府中の邊迄送り届け、主人の身の上心元なく、取てかへす道にて惡右衞門よ出くゝし、暫く戰ふ共間にかふも墓ふて葛の葉樣、は心庭届きしと悅びいさむ向お、又むら〳〵と惡右衞門大勢引連ぞつとかへし、葛の葉を見るかも扨こそ〳〵、すいりやうよたがゝぬ女が不所存、保名主從討て取、姫を奪へ、と下知すれゞ與勘平最前手並ゝ見せ置たに去やうもとりもあきうさいがき、此奴が引導よて爰で信太の土とあれと、わつとおめいて切てかゝれゞ只一人に切立られ、皆こい〳〵と跡をも見ずして逃て行、保名

夫婦ハ大きに悦び、適手拐奴殿長追ハ無用ぞ、きやつらが逃るも與勘平、拙者が追ぬも與勘平ぞ夫婦中も與勘平是も偏に信太の神のゆ惠と、旦那を祝し、ぞ出世を松の葉のき、住吉に隣たる、津の國安倍野ハ我本國、暫くかしこに引こもり、時節を待んとゆさめ共、立足さへもよろ〳〵と、風にもまるゝ柳の枝を、杖よ柱と葛の葉が、夫の手を引いたハりて、畦道、細道まがひ道、石津川を打渡り是より先ハ道をよし、西へ〳〵と入日よ連て行もよし、人目忍ぶハ夕暮よし彼よし、是よし與勘平、夫婦を誘ひ津の國や安倍野を、さして急ぎける

第三

鴻飛で冥々才者おんぞ慕んや、左大將橘の元方ハ櫻木の親王のゆ契り淺からぬ、六の君を失ハんとぞ菩薩が池の底深き、工みも案に相違して行方の去れされぞ我身よかゝる後難を恐れて心安からず、家の雜掌

早船主税野袴よ草鞋がけ庭上よ畏り、ば菩薩が池の非人めが奪ひ取し六の君、草をわけても尋出しゆ褒美よ預らんと洛中洛外いいふに及べず在々所々の非人小屋、野臥の乞食迄かたわしよ責とへ共、それかと疑ふ手がゝりもいず、さつする所風をくらひ當地をさりしよ疑ひあし、此上い京近き隣國を一吟味ば所存いかがと窺ひける、左大將點然と打うあづき、ぬけめあい詮義の仕かた去あがら、腕に覺の悪右衛門祂へはつぱめ泥水を呑せしい、非人あがらおとこのやつ、都に居ずべ近江路か若狭丹波路五幾内殘らず、搜し出してよき一左右、早船と呼名字も時よ取てさいさきよし、頼い汝我主税よ、ハヽアお氣づかひ遊べすあと、ゆ意よ乘出す早船主税ば前を立ていさみ行、小廣間の松戸押ひらき、執權岩倉治部太輔聲をかけて是々主税當もあい他國の詮義遠道より近道よ、此治部が老眼で睨付た詮義が有、此筋道を糺す迄旅用意入ぬ物と、主税い次

へ岩倉が座敷へ通れゞ左大將、詞治部大輔只今の詞のはし、何かゝ云ら
ず近道とゝ聞ぬ先から心地よい、ヤア近ふ寄て其入わけ、近ふ〳〵と主從
が膝と〳〵をつき合せ、此年迄ねらひ付た心の的、百よ一ッもはづさぬ
眼力、六の君の隱れ家かぎ出した近道、餘り近さに聞て悔り遊ばすな、外
でもない御家來内拙者よゝ現在の聟芦屋兵衞道滿といふ鼻の先の近
道いや〳〵芦屋親子ゝ無二の忠臣、何をもつて二心とゝゞ、殿あまい〳〵、
忠臣顏に得てはまる、夜前四ッ過ぎ門をたゝくゝ、娘の築羽根夜中といひ
徒歩跣何故に歸りしと、樣子を聞ゞ女のおしきせ、慳氣からの女夫喧嘩、
其慳氣の根元が某が見付所、芦屋兵衞が屋敷にゝ陰陽の守護神叱枳尼天
を勸請、不淨穢れを忌といひ立、家内の上下ゝ勿論連添女房も寄付
ぬ彼叱枳尼天の圍の中、世を忍ぶ女の泣聲それからおとつた娘が慳氣
詮義といふゝ爰の事、世を忍ぶ女とゝ疑ひもない六の君、主の仇を助置

不所存者よ娘ハ添さぬ、他人と、成て此治部が急度詮義仕る、と語るもよしや芦屋が難義、蟻の穴から堤のくづれうたてかりける評義ハ、左大將良分別し、遉老功尤も目の付所、殊よ兵衛が妹ハ左近太郎照綱が女房、妹聟の主の命ムウ〳〵そこを思ひ助けあべ、直よ先へ渡す筈、我屋敷にかへすとハムウいや是治部、あやまつて疑へべ人も我も俱に亡ぶ、今一應根をかしてと聞も果ず、ホ、うたがハしくべ娘が咄しは前にてヤさせんとか次迄同道、何築羽根を同道とやそれハ幸、左大將が目矩をもつて祝言さした築羽根、悋氣の肩を持顔で底たゝかせて聞胸と、主從うあづき呼よ立親の指圖よ、築羽根が思ひの數やみあの川、戀ぞつもりて淵と讀うたて悋氣の廻り緣過ては前へ出にける、築羽根、そちが身の上元方卿お聞あされ、親が案ずる苦もたすけ中あをしてくれんと、ナ有がたふ存お禮申せ、いや〳〵禮にハ及べぬ、主といふ名ハあれど畢竟元方ハ媒妁役、

夫婦間のもや〳〵是に限らず幾度も聞うち悩氣のおこりをとつくりと聞ぬいて、をめる氣を休めてやらふ何と嬉しいか、サア底意殘さず打明て語れ聞んと有けれバ、是ハ〳〵有がたいとヤさふかおはもじとヤさふか冥加あいお詞、高いも卑いも夫婦闘諍、みす〳〵男が惡ふても女房あらでハ非よ落ぬ、そこを思ひやり給ふもハ息所樣といふ、お獨の姫君を親王樣へ上あされ、お中のよいがよい上に若宮を出かしたい、をふかかうかと思し召お心からわたしが事迄捨置れず添いハ挨拶、お詞につきあがり續聲もあふ嗜る、とお笑ひ草も顧ず、一から十迄ヤ上ま丈よ、あの兵衞道滿殿ハ、嫁入せぬ其先の、つゝと前から目利して、わしが男に極札文玉づさハ數丈れず、付まい物かほれまい物か、先第一器量がよふて疲をせずふとりもせず、男一疋武藝に勝れ奉公に私せず歌を詠で詩をつくつても手も見事學ハよし茶の湯立花扇の手打囃子ハぬけ物、ま

た、肝心の藝を落した陰陽道い見通しの下筮ほんにぬしの藝揃へかそへ立れバよみかるた七坊よ蛎付事の多いきつすい男こがれ死と云た所を呼いけたに仲人、それからい又嫁入を待程に〳〵ちいさい時正月を、待たいいそ〳〵急ぐ月日よ追付て、嫁入云たいおとゝしの、ゞ、おとゝしの、あんまりの嬉しさよ忘れよくい月日をバ。チノ此親が覺へてゐる、三月六日ィ其彌生〳〵、コリヤやい其やよひもよい程よ取おけ、前置が長過て殿も親を退屈ゐ、イヤ長ふても退屈でもいいねバきこへぬあの草双紙の物語りを序文を聞ねバ末の段が捌けぬ、に退屈よでざん云よが祝言の口開きお聞ゐされて下さんせ、三月い花の縁散安いといふ心で、取結びもせぬ月と人の思ふい誤り、詩經といふ唐士の書よ、桃の天々たるその葉蓁々、この子爰に歸と、かたいやうに聞ゆれバ假名でいへバつい嫁入、其夜云ん〳〵云、つぽりと寢てからが猶よい男、こんゐ果報ゐ目にあふも

殿樣の皆おかげと閨へはいる度毎には所方を三度禮拜、有がたいに氣が付て、此有がたいあんばいを姚共がそびかふて配分さしてゐるまいと主の行ゑやる所々跡から築羽根鯨に鰊いかれぬゐ勸請どころ女子ゐ不淨近寄ゐと、七里けんばいきかゐるゝ天女樣が氣ぶさくに、或夜そつとさし足で立聞すれば咀く聲、扨ゐとくゐつと氣がのぼつて、ふん込で穿鑿ゑよか〳〵慥に見届けてと、其夜ゐわざと色目よ出さず、明の夜も又明の夜もゐ、二度も三度もためしてとゐ辛抱づよいよふとらへた、此左大將さら堪忍得せまい、シテどふゑやゑぴりきらしたかゐりにゐ、神佛にかこつけて隱しくろめる妾のこそ部屋、ゑかもゐま若い女のいたづらそふゐ舌つきで、泣つぐといつゑくさつたが恐袋の破れかぶれ、男の胸ぐら斯つかんで、娘おれゑやゐやい、イヤおれとゐ云さぬ、こりや手ひどい八月の風で傍がたまらぬ、ま、ちつとたまるまい、よふぬけ〳〵

とたまゑやつたの、こあたの有がたかりやる、箱入妾爰へ出ゑやおそいとおれがまくし出すどうゑや〳〵とふり廻され、是い親をどふするぞ、ゆふべのを持越て悋氣の二日酔ゑやあ、性根を眼もさまして見よ汚前ゑやが馬鹿者とつき放されてそれ〳〵、まつ其やうに睨つけ妾をい勿躰おい、吒枳尼天を守護の爲八百狐宿直のは番、疑ふあ人でいあい狐〻と嘘八百、男のむでい氣に成たも妾めがさする業、にくい無念おけおしと聲を心もせきのぼす顔い上氣ゑ目も血走る悋氣逆立悋氣の咄しはあしかうじてあら涙、人目遠慮をおい ゑやくり畳たゝいつ身もだへし恨歎くどいちらしし、左大將治部に眴し、そちがのが皆道理胸のくつたく晴してやらふ、誰か有、芦屋兵衛に急用有只今參れとヤてこい早ふ〳〵と、使を立、築羽根兵衛が來次第異見ゑて裝束の間で盃ゑゑよ、機嫌直して奥へ行と詞に上て落さるゝ夫の難義と露ゑらず、はつ

と嬉しさ疊ゑ額築羽根が身の一期忘れまいは情、爺様悦んで下さんせ外の挨拶千聲より、お上のたつた一聲が連合へ釘が利、はんゑ〳〵お主の光りゝ嚴しい物、親の光りゝ七十のつむりのはげた光り玄やとは、忍み立て奥へ行、邪广もかたづいた芦屋が來るに間も有まい、此治部が存るゝ紐手の者を隱し置引くゝつては穿鑿、ア、老人だけ息短い拷問ゝ奥の手大剛不敵の芦屋兵衞、麁忽の手向ひあぶゑ物、何事ゑげに氣をゆるさせ身が前へ引付置留主へ廻つて岩倉ゝかれが屋敷の勸請所、ぶちこぼつて詮義〳〵、ア遊〳〵は分別出來た〳〵と儲く所へ兵衞殿は出仕と呼ゝる聲ゑ左大將治部ぬかるゑと言捨席を立ゑけり、急沙用氣づかゝしと蘆屋兵衞道滿ずる〳〵と打通り、ア舅殿是に沙入かあゝた〳〵敷は使は用節氣づかゝし、貴所にゝは存じゝぬか、イヤ何事も承ゝらず、そこの出仕召れゑゞ裝束の間へ通せと有は用の筋ゝ衣紋の義かさゑ

くべお好の鞠の義か、ヤア お目よかゝれよ、然らば左樣と立けるがイヤ何ものでござる、夜前女べう筑羽根が何やらむ云やうよ腹を立、イヤ是い内證先に前へ沙用云まふてに意得たし後刻〳〵と入にける、云すましたりと治部太輔玄關へつゝと出、是々主税、暫時も急ぎの太切に用に召がへの馬引れよ、承いるといふ間もおく逸驄よ鞍置て、引立來るを引寄て馬上に兎と乘移れば、築羽根奥へ走り出爺樣やらぬと立ふさがる、ヤア 小ざかしいおぜとめる、おぜといおろか樣子殘らず聞ました、おまへを詮義よやつていお女房の口から訴人も同然おつとへ立ぬ義がたゝぬ、娘の身よもあつて見て待て下され待給へと手を合すればから〳〵と笑ひ夫とい誰を夫、もどつたれば緣い切た他人の詮義よ何ほへづら、そこ立さらずべ蹄にかけんと乘出す馬の平首よひたと兩手をかけ聲もかよいき女の足ふみしめ、引とゞむれば又かけ出す馬のさんづも子の身よ

ん冥途の呵責と恐ろしき父が邪見のうゐり聲放せ、んあさじのけのかじと命おしまぬ築羽根が、身ん捨小船あら磯の波よをまるゝでとくにてひいつ、ひかれつんづみを取てあぶみのんあ、んたと當れゞそりかへり、あつとさけんでもだゆる娘父ん、いきみの鞭泥障打立てこそ別れ行隔つる中のあしがきや、芦屋が屋敷一かまへ唖枳尼天を勸請所庭の新樹のかげもれて入日差明のきのつま中居、茶の間がとり〳〵よ掃除ん常と夕清め、ゑやんと云まふて、ゑんど、奥樣がお留主ありやどこもむさいといれまいで、ほ奉公よ氣かんる、それんそふよ此奥樣、お里へふいとおかへりじやが此しまひん、どふつくのイヤふかふ案じやんあ、日來お中のよい御夫婦、一日二日んたつ腹もひとりあをるお一人寢淋しさに呼にやつた戻りましたでずもゐいのふ、家にあふてあらぬ物ん、上り框と女房と世話にもいふじやあいかいのふ、ほんにそふじや、こちらも道

尾よふ奉公勤、相應あよい男の上り框に成たいと口々、あまめく折こそ有、供禮のかいぞへも梨子地蒔たる鋲乘物えきたいへ昇いるゝ、それ何といわぬかのわや奥様のお歸りじやと、ざわめきよつて戸をひらけば、築羽根あらで兵衛が妹左近太郎照綱が、妻の花町身すぼらしげに立出る、ヤアとりや奥様が違ふたと、明たる口の乘物身わとつかわ急ぎ歸りける、女子共袖引合いつものお里かへりとわちがふて、つき〳〵もあい裸乘物つゝと持かけそして又、いよえあのひつえよあさ花町様のお顔もちも、ぞふやら濟ぬわけらしうてひよんな事じやとつぶやく聲、聞わつつてお茶の間が、こちの奥様お歸りでさびしうてわるいよ、かわりにさられさんしたりやにぎやかよあつてうれしい、エ、こゝあわつさいつか〳〵物を云んあと、えかるを聞も身のつらさ、花町が目わ涙、皆の推量にちかわず、あかぬ中にそそわれぬ義理夫左近太郎殿いとまやるとの悲し

い詞、我身の上の歎きよりせつなきに今の噂兄嫁の築羽根様おさとへとに氣の毒や、兄兵衛様にお屋敷にか、旦那様には前から呼に來て、先程出仕あされました、父上も沒いつをよよか、イ、エ將監樣には隱居所におやすみあされてござります、どれお去らせよと立を引とめ是あふ、お氣休めの假寢おこしませずとわしが往こ、去たが常とにちがひひとりにどふやら、皆の衆ちからに來てたもやと去ほ〳〵として入にける、門前よ轡の音いあゝく聲も高く〳〵と右大將の仰を蒙り岩倉治部太輔國行、詮義有て向ひしと股立あがらつゝを通り、將監にいづくに、有罷出よと權柄あり、物よさにがぬ芦屋將監去づ〳〵と立出、治部殿何か詮義ひとあ、近頃沒太義千万といにせも果ずャァおちつき自慢笑止〳〵、詮義の筋にいふよ及ばず覺へがあろ、吒枳尼天の勸請所ぶちくだいて落つかせふとおくをめがけ行ば、是ゝ待れよ曾し〳〵と引とゞめ、此うち

をせんぎとんさ、聞へた加茂の保憲が家の秘書、金烏玉兎とおづけし奇の一卷、左大將のは下知にて世悴兵衛が手に渡り陰陽道を傳へつゝ家の重寶去よよつて斯のごとく別殿をかまへおさめ置、もしん他見も致さすか疎畧よも去て置かと、おうたがひの吟味あらば沒無用に遊ばせ、イヽす治部が詮義ん各別此内に女があると、築羽根めが悋氣から腮たゝいて顯んれた、其女とん六の君あらがんずとも爰へ出せ、是ん存も寄ぬ事、嫁がいんふが誰がいんふが此方に覺おい、殊に吒枳尼ん天部のあら神、穢れ不淨を忌給へば駒が外ん親をも入す、まして女性を此内にとん治部殿の氣のまんり、かんいげに何嫁がうそを築羽根置れい〳〵ヤアおぼへおくん戸を開け内を見せぬんくさい〳〵、同イヤあけておめにかけたふても見らるゝ通り錠をおろし、鑰を世悴が懷中致せば沒苦勞おがら歸宅迄、其鑰治部が待參せしとずつと寄て大の錠、老の拳の古力ヤアえい

うんと一ねぢよさしも手づよき鈕があものぼつきと劈て飛ちつたり。將監見るより岩倉の肩骨つかんでいねかへし、びらうあり治部の太輔鑰でわくれぺいひぶんあいあぜねぢ切た、年とそ寄たれ蘆屋將監留主を預けし世悴へ立ぬ、此うちへつま先でも入て見よと反うつてねめ付る、ぺけのかいが兀かゝるでやけと出てぴこつくか、ねぢきらふがぶちわらふが、岩倉が私あらず、左大將のは差圖使者を切氣で反うつたか、主を切かゃぬけと威光をかさよきめつけられ、主といふ字に打反のやいぺもあまり手もたゆみ息をつめて扣へ居る、ぢつとそふを有まいと圍のとびらふみひらき、かけ入ぺ女性の聲わつとさけぶを引さげ出、大がたりのいきぬす人ゴリヤ六の君を見ておけと、さし付られてゃいつと呆れしぺかり詞あし、花町かくと見るよりも傘がさしかへ脇ぺさみ走りよつて是治部殿、六の君のは家來左近太郎照綱が女房ひかへて居

る厄病の神でかたきとやら、そなたの詮義で姫君を、思ひがけなふ爰で逢ん優曇華の花町、尋常よわたゝやく、はざいたり引さかれめうぬに渡してよい物か、そこ立さらずゞ眞二ッと刀の柄に手をかくれゞ、花町もぬきかけてたがいよぎしむまん中へ將監わけ入おしとゞめ、花町ん請とる氣治部殿ん渡さぬ氣、あらそふ果んたがいのきつさき其姫にわやまち有つてん、お使者の越度爰が一ッの了簡所、六の君是よ淫入とん神をつて存せぬ某、見屆けられし上あれゞ我に預け置るゝ共、越度よあらず事にもあらず、ものゝふの義ん他人より親子の中があをんれ業親よも隱す世悴が心底尋ぬる迄預けられい、コレ手をさげる治部殿と詫るも聞ずせゝらわらひ、義のゝやゞるのと人らしい盗人の同類あらぬく、事をわけていひ聞すよ預けずゞあつけぬ迄、舌の根が延過る奉公引た隱居の身、使者よゞゝりも二度とん赦さぬいひがゝりあれゞ

是非預かる、あらべあづかれと姫をゆん手にわきべさみ、馬手に刀ぬき放せべ親も娘も拔合せ、切あふ中にたへ〳〵の息もくるしき六の君、見るめもあ〳〵花町が打べひらき將監が切てかゝれべふりかへり、たゝかふ强氣劣ぬ勇氣も夕陽のかげ薄く胸へときつく暮六つの、かねの聲〳〵六の君わたせ〳〵と追つめ〳〵切込太刀筋人顏もおぼろ〳〵に見へわかず、芦屋兵衞道滿淨所をさがりの歸り足、つゝと寄て岩倉が首筋つかんて狗猶あげとろ〳〵ところび打たりけり、起あがつて道滿何と云て今戻つた此治部が歸る迄、淨前へたゝさぬ約束云やが、扨へぬつべりいひぬけたあ、其ぬけやういへきかん、ホ、人を出しぬきあとへ廻るぬつべりへわぬしが事、淨前をはやく退出せしへ女房が嫉妬の間違ひ事あらへれしと推量し心底つゝまず上、主人の手前さつぱりと埒明たり、埒の明やう聞たくべ立かへつて主人ゑきけ、逝やうが遲け

れば棺桶でおくらすぞ、ホ、棺桶といよふいはふたはかいきかしてかもしろい、立かへつて又來る迄六の君預けたぞ、コリヤ詞つがふたおぼへて居よと跡をも見ぬしてにげかへる、道滿ハ姫君のちり打はらひ、ほ手を取ざしきへうつし奉る、將監道滿ハ打向ひ、櫻木の親王樣ほ寵愛の六の君、頃日見へさせ給ハぬ迚、ゆ父好古卿のほ愁傷尋る姫を隱し置剩へ今のえだら、親にもえらさぬ汝が心底いぶかしと有ければ、ハテゆ不審のだん御尤姫君をかくまいしハ、左大將殿へゆ忠節道滿が今日迄、胸ハおさめし忠義の紐解、妹もそれハて承ハれ、淺間しや左大將殿官祿ふ足無お身が下ゝに劣つたる娘をあてハ出世の望みほ息所お懷妊おそあハるも、六の君が有故殺してえまふにほ思案一決談合相手ハ治部太輔某を密に招き、陰陽龜卜の奇ゝ妙ゝ人を呼出す秘文を書せ、築地の裏門北向の柱に張、六の君をそびき出し石川惡右衞門に云つけ、ほ菩薩が池にて失

んとのゆくんだて、とゞめても承引あき主從疑たる非道の惡念、六の君を殺した迚ゆ懷姙あるべきや、かへつて人の恨みの報ひつゐよん惡逆顯れ、ゆ身の滅亡とふかるまじいかゞんせんと肺肝をくるしめ、所詮主人の望みのごとくゆ所そびき出すとも、お命を失んずゞ後日の難義ん有まじと、先へ廻つてゆ菩薩が淵惡右衞門を池へ取て投込六の君を助けたる其薦かぶりん此道滿ねんあふ助け參らせしが、父ゆの方へ戻しでん主人の惡事顯んす道理とやせん覺悟ん吒枳尼のゆ殿供物をもつて今日迄養ひ中我心ん、主人を大事と思ふ故心躰髮膚をわけられし、父よりも主ならさずかほど迄忠義を盡す道滿が、心を無下にあし給ふ曲もあきゆ主人やと忠義にあつき涙の色父も感するばかりあり、六の君涙あがら道滿の心づかひ、けふ迄命ながらへしんあさけの上の罪科ぞや適女の道よ叶ひ親王樣のお添臥あかぬちぎりをむごらしやかあじ

みやこゝ有あがら、父母の汚顔をも見る事かあいぬ世の中に、いけて思ひをさせんより殺してやいのとぶしゑづみ、あけき給へば花町も汚理りやとばかりにて俱に、袂とをゑぼりしが、道満重ぬてくこしもと共、六の君迫奥の亭へ伴ひ中、汚湯をひかせ奉りお髪もあげよこよひいせけんうちはれてほうさはらしにまひうたひ、夜とともあくさめ参らせよゝと一度にういでうしお赦しが出たはやり歌一あがり訊をゞや、姫君様よりこちらがあくさみ、いざ汚立とざゞめきにさそわれ、おくに入給ふ、花町いあと見送り扨てもうれしい頼もしい、兄様のほ心入、聞てさらりとわたしが胸も打あけて中ませふ、さきはぞい父上にふつつりさられもぞりし、といふたにいわけが有、照綱殿のいとまの乞るし是見給へとふところより、取出し指寄れば、是い只今いひ聞かした、人をつり出す秘文の神符是をいとまの乞るしとい、それを乞るしといふ譯い、姫

君の此間見へさせ給へぬ館の騒動、方〳〵へ尋ねゆくやら神佛へ願だてやら、まじないの祈禱のと狼狽た上ゆまだうろたへ猫のまじないと取ちがへ、ほの〳〵の歌を逆様ゆ迄張たれど其秘文ゆ氣の付ず、遙後に見付出した照綱迄へ遠目高、是へ噂に聞及ぶ陰陽の妙術、今此術を行へん者道滿より外ゆない、主人をうしなふ敵の妹添事あらぬいとまやる、といふ物のそひたくゞ此ゑるしの詮義して兄が首切てこい、ア、畏つたきつて來ふと請あふたわしが此口罰が當つてゆがまぬがふしぎゑや、何も角も兄がいに了簡して下さんして、六の君迄お供すりやどともかしとも納ります、父上もよいやうゆお詞添て給へれと思ひあまりし願ひある、うつけ者、六の君戻してよけれゞ道滿がとを戻す、主人の惡名露顯を憚り心をくだくゆ氣が付ぬか、そこの所もゑらぬでない、左大將樣の惡事ゑやといひさへせねゞ濟と思ふな濟ぬ〳〵、おの

れを將監殿の子であいか、武士の祿をくらひあがら道滿が詞あんと聞。六の君よ御湯をひかせお髪もあげよといふたいあ、此曉に御首をエイああたをや、近でろいたいしくい存ずれど主命是非に及べずと胸い涙よくもり聲、花町はつと氣もおちてとかふ、いらへも泣居たる、將監い兄弟の心をくんでひかへしが、ヤア道滿左大將の御下知畏つたと請あふたか、成程〳〵顯いれしうへい詮かたあく先刻たしかよは前にてゞ、麁忽〳〵、六の君をうしおへゞ左大將のお身の大事と、忠節の九ッ梯子八ッ逆のぼり詰、今一ッをやとかれて御首を給いらんといい聞へた、異見しても聞入あい主人よはつとあいそづかし、後日の罪科に合給ふを見物する分別あ、コヘ仰共存せず伍子胥い諫めて誅せられ眼軍門にかけられしが吳王の耻辱を見て笑ひしとや、毛唐人の了簡と道滿が心い格別、主の耻辱見物する望みあし、首討ては前へさし上其塲をさらず切腹いた

す、はらを切て相果れば主人の科い遁るゝじやあ、其方が腸鳶烏の爲にいあらふが、主のためにいちつともあらず、爰を能分別せよ、主命もそむかず姫も殺さず事をおさめる仕やうが有、將監が思案にい、六の君の首討てお命が助けたい、是親人、首討てたすけといお詞が紛らいし、イヤまぎらいしい事いあい、六の君の首うつて、たすけよといふ事と、聞より花町さしよつて、ア、願ふ所のは了簡は首うつて助けといい、此花町がおそれながら六の君の汚名をかり、兄樣の手にかゝれば兩家のお主人忠義を立、死た後で連合に出かしかつたと譽られば、それを未來で夫婦のたのしみ、やい道滿此六の君を見違へあと、詞すがたもいやあらためおもひ切たる覺悟のてい、將監涙をいら〳〵とながし、花の中の黃鳥花あらぬして香といおとが事よ誠有左近太郎に連そへば、心も剛に忠義を立お命にかいらんといい、出かしたり去ながら、おとも十人並あれど姫君にい

似も付ず、殊に目がしこい左大將殿、請取れねばやぶれのもとそちが望みん叶んぬぞ、そんあら外に誰人ぞよふ似た顔がござりまするか、有共〳〵外迄もあいかうあらんだ中に有、道滿とがめて、此中とんさし詰妹花町より外にんあし、イヤあるく、億兆の人あるじからずといへども、似た顔も有ば有もの、六の君の面ざしよす分違んぬ其顔が、天地の間よたつた一ッ、ムウドレ其一ッんヨ、六の君によふ似たん、將監が此首といふに驚く斗あり、ヱ、父上よつぽどあ事おつしやれ、王のやうにすき通るお顔と、六十よあまつた皺だらけのしらがつむりと、まだ其うへに姫でぜと男と若干とといんふか、お月樣と泥龜ほど違ふたお氣んのぼりんしませぬかへ、ヨ、違んぬ所をとくと聞、兄ん主命討ねばあらず討してん妹が立ず、中を取て某六の君を連てのく、すりや親とても見遁されず追かけて道滿が、將監を討間姫ん遁れ落給んん、ナ譯にん白髮の此首、右の樣子ナあば忠

義よかへて親を討、二心おき道満、左大將殿ぐつ共いれず、それおりげりに事いすむ、とゝろいげた此首でも身がいりにおればおり樣が有物と、一ッの命を兄弟よわけて忠義を立さする親の慈悲こそ有がたき、道満はつと恐れ入我々を御不便のあまり、お命を攫んとい勿躰おやおそろし、道を守るい忠孝のたゝ二ッ妹が心底とふに及ばず、不孝と呼れ忠義い立まじ、こゝ兄樣そふでござんす、父うへの仰でも此事斗いそむかよやあらぬ、兄弟い他人の始り他人よ連添花町、心ゝに忠義を立る、ヲ、出かした某とても其通り幾たび仰有迚も、いつかお承引仕らぬと詞をはあつてヤける、親の心を無下にして兄弟共よ承引せぬお、ハア、殘念是非がおい、道満が討ねばは前濟ず、自害してい犬死はておんとせふ役に立ぬ事いふ手間で、經陀羅尼の一ぺんでもあなたのかためと立て行、口に隨求陀羅尼の文不正不正不正不正、親子の心もばら〳〵よ連

て其夜も、ふけわたる、月かげくらき植籠の、裏の高塀枝さして茂りし松の音するゝ、風か、有ぬか忍び込女心の逞しき、枝をたよりに傳ひ來る、花町ゝ待人のそれかと思ふ、窺ひ足、ひらりと飛ゝ女の姿、何者あるぞと走り寄顔を見れば兄嫁の築羽根、花町か、何ぞや花町かとゝ、ヱ、はんにこあたゝあふ、人の女房の風うへゝもおかれぬどう畜生、よふも〳〵太切な夫の訴人、あつかゝづら火にとりずと忍び入たも親が差圖か、六の君を助けふかと氣づかひで吟味に來たか、何とそふで有ふがなと、腹立まゝの惡て口聞にあやまる身のせつなさ、女のさがなき悋氣ゟ夫の難義、姫君を失ふてゝ道立ず忍び入た心ゝな、お身にかゝつて死る合點連合の妹ぼの、お手にかゝれば築羽根が本望ヤア切て下さんせと、おくれかきなでさよげなる首さしのぶれば、ホヽ得切まいと思やろがはんに切ぞやヽヽ夫の屋敷へ戻つて死るが、親とひとつでをい云わけヤア切て、ヱ、何の

切ぞいの心い云れた疑ひいはれました、わしがけふ戻つたい兄様を夫のうたがひ、そち斗でい心もとない今宵八ッを相圖よして忍びいらふ、でざれと約束左近殿が後ろだて、お前とわしが心を合せ姫君をたすけると、二人が談合物かげより窮ふ蘆屋道満が耳にこたへる八ッ鐘すいやと松の枝おしわけ、云のぶ出立い夜廻りの装束りゝ云き甲頭巾、ヤアでざんしたか待衆たと云聲高しだまれ〳〵と仕かたでをゝめ、ふいと飛だる足かろ〳〵うあづき合て三人いつ云よ、勝手覺へし廊下の脇道鼻息もせず忍び込、時もたかへず又高塀の屋根よすつくとたちつけ羽織、同じ出立の甲頭巾、塀をおりふし人いおし、心安しと門口の貫の木そつと明かけて、退足の勝手迄云ずましたりと忍びこむ、先へ入たる忍びの者六の君を奪ひ取、廊下をつたひ立出る道満手鎗おつ取てヤアどこへ〳〵顔い隠せど左近太郎尋常よお供いせで、盗賊同然の行跡及物よごしに

命ハ取ぬ、姫を置て立歸れと、聲かけられて返事もせず、姫を奥へ押やり〳〵無二無三に切かゝる、さゝつたりと鎗取のべつけべひらいてうつ刀、ハつしとハねて透間あく弓手のわきべら馬手へずハと窓通せべ、うんとさけんでどうゞ伏、花町見るゟ夫のかたきのがさぬと切付るを引ばづし、片手ゟつかんでねぢ伏れべ、其娘あやまちすゝと頭巾をぬげば父將監、ハツあむ三寶早まりしと、驚く道滿花町も供にうろつく斗あり、將監深手にちつともひるまず、年寄ハ腕のハたらき汝にハおとりしが劣らぬハ課、兄弟を不便に思ふ親の了簡を聞ぬ故、裏門よりそつとぬけ又我内へ忍び込、親の心を天道も憐み給ひしか、左近太郎が來る共ゝらず忍び込某を、左近太郎と心得て妹といひ兄といひ、我子をだますも我子の可愛さ、つきとめられしハ本望ぞや、さき達ていふでとく六の君を落せし將監、親おから討とめしと白髮首指上れべ、道滿が忠も立花町が

夫婦の中、兄弟中も違ふなと心を碎きし我最期悲しとべし思ふなよ、なきあとの吊ひとて僧も呼ぶな供養もすな、兄弟中よくゑてたもるが冥途のみやげでおじやるゝと、聲も涙にむせかへれば花町悲しさやるかたなく、ふたりがふたりで父上とゑらぬ不孝の五逆罪、わぶるにかひなき、ほ最期やと、わつとさけびふしまろびあげき、悔むぞあゝれなり、道滿涙押ぬぐひ、ゑ、ゑおしたり〳〵、某武藝の餘力にて陰陽龜卜の道をあきらめ、天地の變化人間の禍福指所をちがゝさず、又ゝ箱に入て隱せし物も算籌をもつて占へば、柑子あれば柑子とゑり鼠あれば鼠とゑる、妙術を得たる身が、わづか一重の甲頭巾父共ゑらず早まりしゝ、陰陽師身の上知ず、子の身として親を討忠節顏ゝ不孝の不孝、天の征罰得んより道滿是にて生害と、指添ゑ手をかくれば、やれ待とめよ花町と、父が詞も妹が絆るもいや〳〵ゝあせ〳〵とせり合たり、是ゝ道滿早まるまいと聲を

かけて左近太郎、姫君築羽根伴ひ出樣子ゝ奥にて承ゝる親とゑらず手にかけしゝ、天道かよくゝ存知落命有てゝ不孝のうゝぬり、自害をとゞまり臨終の迷ひを晴すが孝行ぞとさま〳〵におしとゞめ、老躰の命にかへ六の君の沙介抱がれとゞ是といひ有難きゝ厚恩、せめて一つゝ報ずるため、恨み有左大將あれ共ゝ親子の忠義を感し親王の沙前へゝ沙汰おしに仕らん、沙安堵有て往生遊ばせ、コレ姫君ゝ築羽根殿いつれもよつてゝいとま乞ちかう〳〵と取廻せばくるしき中にもよつとと笑ひ、さ、忝い聟殿、主人の名も出ず世悴も存命、今こそ嬉しい、隱居の宿がへ、安樂世界でたのしまんと、鑓引ぬけば老の身のもろくも息ゝ絶にける、人〳〵叶ゝぬ道あれぞ今更ゑたふ別れの涙おしみ悲しむ聲〳〵に八聲もつげて明わたる、治部太輔ゝ刻限ぞと門内へつゝと入、六の君まだうたぬゐ、サア此檢使が見るまへですつはりいゝしはや渡せ、早ふ〳〵と罵

つたり、おりあしければためらふ間鑓退取て後ろより、あむあみだ佛と築羽根が念力脊骨へぐつと通り、ぎやつと一聲岩倉が日來の我むさやも急所のいた手、只一鑓よ死てけり、築羽根死骸に立あらひ鑓の穗先を逆手に取咽ぶへに押あつる道滿よつて鑓もき取、某への云わけ斯あふていかあいぬ筈、左大將の惡逆も皆此治部が入性根、早いか遲いか通れぬ最期、所もかいらず日もかいらずそちが親我が父、たがいの子供が手にかゝるためしい末代よもあらじ、不孝の姿をあらためんと指添ぬいてもどりいらひ、蘆屋兵衛道滿今日より武士をやめ、陰陽の博士とあつてかたちもかゆれば名もあらため、道滿と書二字の讀を音よて蘆屋の道滿、刀いらぬとあげ捨れば築羽根も我黑髮切て捨る身あがらへて、眞と親の菩提の發心、照綱大きよかんじ入ア、尤の了簡、名も姿もあらたむれば不孝の人口のがるゝ道理、元より陰陽龜卜の達人存命有ば國家の

寶父尊靈も滿足あらん、扨此治部い檢使の役討れし死骸のいひわけ有や、ホ、ワ其義い心やすかるべし、將監殿の手よかゝつて、斯の通りとヤあゞさしてとがめも有まじき、何から何迄親の慈悲遺言守つて汐首を、主人の方へ持參せん照綱よい六の君、館へいそぎ汐供と別るゝ袂とぬるゝい袖、ひかるゝ心いあれぬ恩愛聟よ、我子よ嫁娘とゆふべい呼れ曉い露と消行魂よゞひ輪廻流轉の空晴て、清き最期い一念不生迷いぬ道い則身則佛、菩提の道に入夫婦姫を、いざあひ行夫婦、孝行忠義二筋を一ツ血筋よむすばれし親子の、別れぞ哀れある

第四

とあり柿の木を、十六七かと、思ふて覗きやゑほらしや、色付た、十六七かと、思ふて、覗きやゑほらしや、色付たかげておる賤があさ機、あさいかゑ、あんの織ぞいの、生長いいふいとし子に、千筋万筋よみいれて、大名島お

りてきせふの所も安倍野のあしがきの、間近う住吉天王寺、靈佛靈社よ歩みを運び、父ゝ我子の出世の祈、母ゝ心を染機の、えんきえんくを竪横よさをゝ車の手談も、子に世話おるとぞ見へにける母ゝ機屋を立出て、〳〵坊稚きのふもとゝ樣こいつにゝ惡いくせが有、只虫けらを殺したがる、今から殺生好んでゝろくゝゝ人にゝ成まい、必躊躇つるゝよ、ねぎや鍋を殺すゝとお呵りゝされたを忘れてか、たつた一人の與勘平ゝ京へ行、留主の間に池へもゝまるか疵でも付たら母ゝ云譯ゝんとせふ、必ゝ庭ゝ外で惡ゝがきしてたもんゝや、ヤア爰へゝおじや〳〵、さきにから間も有乳呑で寢寢仕や、そんゝらかゝ樣晩ゝゝ松虫塚へ虫をたんと取に行ぞや、ヤ、安い事夫もとゝ樣連てござらふ、小言云ずとねんねこせ〳〵、いとしい者を誰がいよ、ねんねこせ〳〵、ねんねが守ゝゝどこへいた、山をこへて里へいた、里の土産ゝ何もろた、でん〳〵だいこゝふりつゝみ樂もゝ

やしもいらぬとそ、手間隙取ずすや〳〵と母へ添寢の稚子ゝいかゝるよい夢見るやらん、おか樣内にかい、添乳あされて云や、頃日の雨つゞきでめつきりと木綿の直がよいが、織だめがあらぬ一疋でも半疋でも賣云やんせんかい、云いと打違おろして腰打かけ、ついでに火をもらふてさらぬ一ぷくいたさうか、いたしてもらふまい子供の寢入口、かさ高よ物いふて下さんな、けふゝ又けしからぬつゐに見馴ぬ木綿買達が、ゐいといふに立かゝり入かゝりこゐたで三人、そして家の内や人の顏を、きよろ〳〵と合點の行ぬ木綿買達でゝ有ゝいの、そふいゝ云やりまする、合點が行いでから高が天下の町の借屋よ住木綿かい氣づかひな事ゝでざりませぬ、斯うろ〳〵と見廻すもゞ、とふやら機に器用そふなおか泡の顏じや定ておりだめが有ふ賣てはしやと思ふからゐんと賣て下さりませぬかい、次第〳〵よ寒ふゝ成夫の肌着よ表がへよ、子にを

さつばりさせたけれと、繰も績を織もそめるも手一つで、内の肌さへふさぎかねる、賣木綿ハいかあ〳〵切一尺こざらぬ、あい所ゑ長居せずとつとゝいんでくだされとあいそおけれど立あがり、ふゝおかさまそふもぎとふゑ云ず共、仕業ハ心につれる物じや、氣たけをあがふ心のはゝひろふ、詞ゑつやおも有樣に其内織て下さりませ、又ハ無心ゑ參らふと、我挨拶ゑはにしてすで〳〵出て歸りけりさゝやかましやよしあい事に隙取しが、嬉しや日脚も八ッがしら、夫の歸りハ間もあらふ、七ッの墨へハとゝく手の片付て饗せん、ねんねこねこととたゝき付、又機前ゑさしかゝり、とおり、栃の木を、十六七かと、思ふて、のぞきやゑはらしや、げゑうハあらぬ、つまはづれ、老人夫婦の旅姿廿余りゑおとおびて、娘め一人介抱し旅迎もまだ泊宿ぬ、足もかろげにそんゑよそこと人の教への門の口〳〵爰よと父の老人二人を近付保名の有所聞と等しく、是迄同道ハゑたれ

共、よく〳〵とへべ別れて早六年、長の年月生死の問音信もせず、此方こそかゝらぬ共、保名の心底量りがたし、先某一人對面し、所存を聞て其上で母も娘も呼出さん、暫く爰にかけかくせいで案内せん頼みませふ、物ヤさんと内よ入、見れ共〳〵人ゝおし、扨ゝ保名ゝ他出召れあの機音ゝ召つかひか、ゝ兎あれそれへ參ると窓に立寄顔見合せ、扨も似たりと惚りし興さめ門へかけ出れべ、女も窓の戸引立てゐる手拍子の音すめり、ヤレ〳〵かゝよ娘よ奇妙〳〵、娘の葛の葉があそこに、機織てゐるゝいと呆れ顔、こつがもゐい是爰に居る葛の葉が、何のあそこよ機織てゐる物ぞ、廣い世界に同じ人間似た人の有いでゝ、アヽ、仰山な事斗、いやゐふたいがい物の似たといふゝ、烏と烏雪と雪、其段でゝおい正銘正眞の娘の葛の葉よ、疑ゝしくゝ覗いてお見やれ、それゝ興がる似た人や、娘もお去やとさし足し、忍ふ間近き窓障子、やぶれに二人が息を詰覗けべ見かゝす顔斗

か、ぞあたじや誰ぞやといふ聲迄、似ハせぬやつぱりはん〳〵の、葛の葉も肝潰れ母の手を引逃出る、あふ〳〵親父殿物がいハれぬ、あちらが誤の葛の葉か是がほんの葛の葉か、親の目にさへ今とあり子にとまくれて氣が迷ふと、投首すれバ葛の葉も、かゝ為道理私が心にさへ、おれがあの人かあの人がおれかと思ハれて、俄に胸がやるせあい、とゝ為どちらをぞふといふ、分別あされて下されと、袖よすがれバ引よせて、三人顔を詠め合溜息ついたる折からに、立歸る安倍の保名、夫と見るより、ヤア庄司殿ハ夫婦か、お身ハ保名かあふあつかしや〳〵、それハ此方も渉同然、先奥へいざハ案内と立袂をひかへ、先々急に渡す者有、コレ預りの葛の葉連て參つた、渡ヤ聟殿と引合されて葛の葉ハ、道二人の親の前いハで心をえれかしの、顔に會釋、ぞこぼれける、保名大きにいたみ入、是ハ〳〵拙者が留主の中早葛の葉よハ對面あされ、衣服を着せかへ今連て來た樣に

見せ、此保名をこまらせておわらひあされふ爲か、女房も女房今始めて來たやうに所躰を作りて何ぞやの、こ、こ、此ヤわけこそ段ゝ浄息女葛の葉と夫婦に成是に有事、先年信太の家にて惡右衞門狼籍の時既に事難義に及び生害仕らふと存る所へ早速此人がかけ付さま〳〵の介抱それよりいつゑよに立退所ゝ漂泊し、此所の住居ゑ五年、安倍の童子とヤ五さいの男子をもふけ、おとあしく生立ヤゑ付是を力らにお詫ヤさば孫にめんじ我不行跡浄めんも有ふかけふい參らふあすいおわびに參らんと、口でいヤせ共何か云よぞんに任せず、一日〳〵と相のび今更お詫ヤさふ詞もあい、重〳〵の不調法孫にめんじ浄堪忍有やうゑ、母樣お執成あされ下されと、身を投ふしてわびにける、いやさいひわけ所であい、來て見たれバふしぎたら〳〵、先あの機織人をひそかに覗いて見ておじやれ、げゑも〳〵女房い爰に居る誰か機を織らんと、つぶやきあが

ち立よつてそつと覗いて惚りし、色をちがへ立かへりあそこよも葛の葉爰にを葛の葉、こりやどふ玄やくいかにと顚倒し、奥を見てゐあきれ顔とあたを見てゐ興さめ顔、物をもいはず立つ居つ思ひがけあき驚きよ只ぼう、せんたる斗あり、當惑の躰至極せり、我も信太よて別れし後惡右衞門が談言にて、重代の所領沒收せられ、よしのの山の片里に世を忍び住其内よ、貴殿の事を戀したひこがれわづらふ此娘、五年の年月色々看病肝を焦す所、不慮に頃日貴殿の有家聞とひとしく、忽病氣平愈し夫婦が召連きて見れば、思ひも寄ぬ二人の葛の葉けふもあすもさめ果しが退いて分別するよ離魂病といふ病有俗にゐ影のわづらひといひ、かたちを二ッに分るといへ共、それも一ッ軒をば離れず時々かたちを合すといへば夫でもあし、正しく是ゐ變化の所爲か又ゐ天狗のわざあるべし、我娘に引合せ誠をもつて理を押ゐ、たちまち姿をあらゐずべし

性根をぼうずる所でおし、保名心を付られよ氣を付給へ聟殿と、夫婦ちからを付給へゞ、仰迄もいんず、我も加茂の保憲よしたがひ、是式の邪正を糺す事、一句一指の手段に有、きつとしるしを見せヤさん各ん暫しの内、見ぐるしく共此物置よひそかにお忍び下さるべしと、よきおき詞に人々もかまへて仕そんじ給ふなと、あやぶ心の物置のすだれを上て忍ゞる丶、保名とおき風情にて内に入、是ん〳〵坊主めがあがきくたびれ、此ふんぞつて寢たおりわいの、童子が母んおんせぬか今歸りしと呼んれゞ、まへだれ襷取あへず、いつよりけふのおかへりんおそかりし、おはたさむにんおかりしか、いや〳〵空もあたゝかよ住吉へ參詣し、かへりん例の天王寺おふ思ひも寄ず六時堂のまへ、お身の父庄司殿は夫婦にはたと行合、日來の不届き胸につのつて挨拶を乞かねたれゞ、あちよん一向恨みのけもおく、有家をきいた故娘にあんふたゝ尋ね來れ共見る

通り連衆も有、此衆をかた付日暮にゝそれへ參らふ、たべ物の用意ゝ無用洗足の湯を頼と中〳〵心とげたる挨拶一つ二つ物いふと思ひしが、かいつまんでも五年の咄し、思ゝず時うつしたゝ、お身も久〳〵の對面嘸悦び身も大慶と物がたれゞそれゝ何よりお嬉しや、日くれとても間もなし、用意無用との給ふ共あんぞせずゝあるまいか、いや〳〵孫をつゞき出しおめまかけるが馳走の一番、お身を髪に櫛でも入衣服も着かへ、玄ばたらとした躰を見せませぬそれが馳走の第二番、早ふ〳〵身ゝ夜と倶の物語り、此くたびれでゝつゝくまい日くれ迄一睡せんと、いひつゝ女房の形ふぜい見れ共驚く躰もあく髪とりあぐる其姿どこに一ッの云ぶんなし、但しゝ娘をつれて來た庄司夫婦が何ぞでゝあるまいかと、迷ふ心の奥の間に忍びて事を窺ひける、妻ゝ衣服を改めて玄ほ〳〵と奥より出、ふしたる童子をいだき上、乳ぶさを含めだき玄めていゝんと

すれどせぐりくる涙ゝ聲よ先だちて暫く、むせび入けるが、はづかしやあさましや年月包みしかひをあく、おのれと本性をあらはして妻子の緣を是切に、別れねばならぬ品にある、父傷よ斯といひたいが互よ顏を合せてゝ、身の上かたるもおもてぶせ、傷身罪耳によく覺へ父ぼに斯と傳へてたべ、我ゝ誠ゝ人間あらず六年以前信太よて、惡右衞門に狩出され、死る命を保名殿よたすけられ、ふたゝび花咲亂菊の千年近き狐ぞや、剩へ我故に數ケ所の疵を受玉ひ、生害せんと云玉ひし命の恩を報ぜんと葛の葉姫の姿と變じ、疵を介抱自害をとゞめいたゝり付そふ其内よ、結ぶ妹脊の愛若心夫婦のかたらひおせしより、夫の大事さ、大切さぐちある畜生ざんがいゝ、人間よりゝ百ばいぞや、とよお子をそふけしより右と左よ夫と子と抱て寐る夜の睦言も夕部の床を限りぞと、云らず野干の通力もいとしかゝいようせけるが、今別るゝ迚父ぢ世の業でもあ

く、元より名をかりし姿をかりし葛の葉殿、恩い有共怨いあし、庄司殿浄夫婦を誠のぢい樣ばゞ樣、葛の葉殿を眞實の母と思ふて親しまゞ、さのみにくふもおぼすまじ惡あがきをふつゝとやめ手あらい學文せいだしてさすがい父の子ほどあり、器用者と譽られよ、何をさせてを埒あかぬ道理よ狐の子ゑやものと、人に笑いれそしられて、母が名迄も呼出すを、常ゝ父こぜの虫けらの命を取、ろくあ者よい成まいと只かりそめのお呵りも、母が狐の本性を受付たるか淺ましやと、胸に釘計さすでとく、何ぼう悲しかりつるよ、成人の後迄も小鳥一ッ虫一ッ、無益の殺生ばしすあゑ必ゝ別るゝ共、母いそあたのかげ身に添、行末長く守べしといいふ物のふり捨て、是が何と歸られよ名殘おしやいとをしや、放れがたあやこちよれとだき上抱付抱ゑめて思いずわつと泣聲に、保名一間を走り出子細い聞たり何故に童子を捨てやるべきと呼いる聲よ庄司夫婦、葛

の葉もまろび出れあちゝやらじと取付ゝ、抱きし童子をゝたと捨かたちゝ、きへてうせよける、庄司目を丞べだゝき、ェ、扨夢斗斯と知たらべ、ふか〳〵尋ねこず共仕やうも有べきに、むざんの次第を見る事やと、夫婦が悔めべ葛の葉も手持ぶ沙汰よ見へけるが、ア、そふ丞や何ゝともあれかくもあれ、自が姿と成自が名をあのり、産で貰ひし此坊ゝ取もあをさぬ我子ゝ、とゝ泡おかゝ様おまへがたの爲にも、眞實の孫丞やと思ふて下さんせ、コレ坊稚今から此母が身にかへていとしがる、今迄のがゝ様のやうに、かゝ様〳〵と丞あつこまう頼むぞや、ヨ、よい子やと抱給へべ、乳を、さがしていや〳〵、此かゝ様ゝそであいと膝を這おり見廻ゝしてかゝ様、〳〵と呼さけべべ、保名たへかね大聲上たとへ野干の身成共、物の哀れを丞れべてそ五年六年付纏ひ、命の恩を報せずや況子迄もうけし中、狐を妻に持たりと笑ふ人ゝあらひもせよ、我ゝちゴ共恥しから

ず、別るゝ共あいたいゐて互に合点の其上に、うせもせよきへもせよ此儘ゐていつ迄も放ちやらじゃ葛の葉、童子が母よ女房よとあいの襖を引明れば、向ふの障子に一首の歌、戀しくば尋來て見よいづみおる信太の森のうらみくずのは、ハテ扨も一首のかたみを殘し、難面も歸りしお我ゐ名殘のこらず共、童子のふびんに思ひずかと、奥にかけ入表ゐ出狂氣のごとくかけめぐれば、童子も父の跡ゐ付かゝ樣ごとへいかゑやつた、かゝ樣おふとかつぱと伏、聲をのかりに足ずりし身をのだへ歎くゐぞ、庄司夫婦葛の葉も俱ゐ哀れに取乱し前後、ふかくゐ歎かるゝ、庄司歎きをとゞめんと思ひゃ保名ふかくゐ、狐斗が葛の葉で我娘の葛の葉おらずや、殊に殘せし一首の歌、戀しくば尋きて見よと讀だれば、いつでも信太へさへ行ば出合に疑ひおし、ヱ、みれんさん〳〵比興至極といさむる所へ、けさが立まふ木綿かい一ッに成てつゝと入り、ハテ安倍の保

名葛の葉、信太の庄司見付たく、斯いふゝ石川悪右衛門殿家來荏柄の段八滋賀木雲藏落合藤治、は主人のは心をかけらるゝ葛の葉を隱し置、保名ゝ密夫同然討殺して姫を連來れと、頃日爰ゑ徘徊しけふ出くゝせたゝ百年め、女房が有ても首があふてゝ濟まい、畏つたと葛の葉を渡せく と呼ゝりたり、老人夫婦足弱の殊に歎きゑ氣も後れ、途方にくれて立騒ぐ、保名ゝつと心付、ア〳〵さゝぐまい葛の葉ゝ童子をいたき浮夫婦を介抱し、裏口を出てかげかくした遠いへ逃るゑ及バずと、袖引からげつゝ立あがり、愚者ゑ向つて返答あし、葛の葉がほしくバ此保名を首にして連て行ケこいと、かたみこそ今ゝあだあれ幸と、織かけし布機の蹉踏かけ板卷竹よ膝梭笈よ枠あんど、はづみを打て投かけく、ためらふ所をまつかせと親機ゑいとこや放し、科有者を成敗の礫といふはた物の、あんべい見よとふり廻し日來にゝ似ぬ強勢も、狐や力添ぬらんは

げしかりける働きなり、落合ハ逃じたく段八雲藏なま兵法、豁と眉間ゑ大疵請のたり廻つて死てげり、人々かけ出手柄〳〵といふさめ共、葛の葉ハいさみなく何をいふてもわたくしゑ乳がなふてハいつ迄も此子が馴染ふやうがないあつちに有てもいらぬ乳もらふてほしいと泣げれバ、道理〳〵それ迄もなく一度ハ尋ね逢でハかなハぬ義理、夜道を行もたど〳〵し明なバ夫婦童子をつれ、尋てきませ和泉なる信太の森へと、

道行信太の二人妻

こゝゑあわれを、とゞめしハあべのぜうじが母上へ、もと方其身ハちくゑやうのくるしみ、ふかき身のうへを、かたりあかしてつまにさへ、そふに添れずすみなれしわがふるさとへかへろやれ我住すてし、一村の、かりのやどりハあきぎりゑ立まぎれたるいろ〳〵きくも、此身ゑるかと

はづかしく、足つま立てちよこ〳〵、ちよこ〳〵とつまだてゝ、
えよてゝみだるゝゝぎすゝき、ゝつと思ひてとりありをつくり繕らふ
笠の内、かたぶく日かげまべゆくて、忍ふ身のさゝりゝ、こゝの人ごとか
しこのゆきゝ、それに、いやあゝ、い、ぬのこゑぞつとした、ぞつとそげたつ
露ぞぐれ、ふりみふらずみ、てりふりに我ゝふるすへかへる身をよめり
〳〵とさとの子の、わのいたいけを見るよつけ跡にまします父母に預
け置たるおさゝ子の、ちぶさ尋てさこそあげかんふびんやと、涙に道も
見へわかず、こゝゝいづくと云ら露もちくさよ、すだく虫のこゑ猶かゝ
しみのますかゞみ、水に、うつして我すがたかい云よ有げに行のぢを、そ
よ〳〵そよく野分につれて、あわやかゝてにから〳〵からり、ひかぬ鳴
子の音すれべもし狩人の有やらんと、あゝてかぞろきふりかへる小鳥
おふ家ゝ戸ざし云て、夫と、とがむる人たにもあいて身をもやくやむら

ん、今ハくゆまじあけか岳と、いへど乱る、〻らんぎくをわけつゝ行ば、程もなく我住森の下かげに立休らふと、見へけるが草がくれして、「こゝにあハれを、とゞめしハあべのぞうじが母うへの、ひとりハ跡よとゞまれど、尋るうみのかたゝ、の、ひとりハ人のたねあらぬ、其うき事に、身を耻て、こひしくハ尋、といとの言の葉に、書捨たるをかたみ共、夫をしるべに葛の葉ハ、保名諸共諸袖に、はだしのたねの、いとし子を、すかしいざあひ和泉あるしのだの「もりへとこゝろざし、ふりかへり見るゆんでもめても、關遠く、遠里おのや淺香がた、あべのも跡と、よ、あよハづの、みつのうらかぜ烈げしきしきよかぜべし引あ引さじと、せおにおふてふきり〳〵す、きりはたりてふ、おる賤が家のおさの音堺の町も出ハあれて、心細道わけ迷ひゆけば、かすかにゆふづく日、人がぼさへもちら〳〵と、くれぬさきよりともす火ハ、神の沙とうかいや白菊の、花に露ちる秋の野か、あ

れこそさのゑともす火の、入江〳〵にあびきのこゑ、風にさそはれ行道の梢まばらゑうらがれてたゝ何とあくさびしきゑ、おばあやさしく、まねぐ、ゑゞ、それをたのみの力草、ゑげる百草道くさを、引手ゑすがりあいらしく、ゆびざすかたゑ、又ちら〳〵と物がゑらすぞ哀あり、思ひゑこがれてもゆる、のべのきつね火さよふけてそれかあらぬかはゝきぎか、まがふかたあく子故のやみゑはゝもあこがれともす火と、はゑりつく〳〵見渡せばかげもすがたもあきこがれゆく大とりの、はがいかさねてひあ鳥をいだきかゝへて玉ぼこの、よるかたわかぬたびあれどいそぐ心ゑ道ばかも、ゆくての森をめあてゑて ゑゞし、つかれを晴しける、誰にとひ誰にとゝまじいわくすの、千枝にわかれて物思ふ我も思ひのこがくれて、保名夫婦稚子をさま〳〵いたゝり介抱し、ア、ゑんどやと葛の葉が薄折敷足休め、ア、あらゝぬ旅路草臥も尤向ふがおこが生れ古郷、こちら

に見ゆるが往昔夫婦の契りを結びし信太の社、ふと馴そめし故にこそ互にかゝるうきめにあふも覺悟のまへ、をかく只世の中に歎きゝあきに悅びを、もとむればこそ歎きとゝあると詠しも今身の上、そふでござんす共あぢあ緣から苦勞あそゞし、お前に添たい〳〵とわしが輪廻のふかき故、惡右衛門にさらへられ二親迄も思ゝぬ流浪、昔の花の住家へ立寄も人目耻かしく、ふかかうかと案ぜしに、てうど薄暮よい時分何とぞ尋彼あかの母淳にめぐり合、此子の思ひもはらしてやりたし、一ッにゝ又私も云たい事ゝ山々、成程片時をいそがんと親子夫婦手を引合彼かくれがゝ何國共しられずしらぬ乱れ咲、菊のうね〳〵そとよ爰よと押はけかきゝけ、童子が母やい、童子の母ぢあふとよべどさけべどこたへさへ、事とふ物ゝ秋の風、野邊にしはるゝ葛の葉の、恨のたねや殘すらん、扨ゝふつゝと思ひ切、最早逢も見もせぬが、、胴欲あ心やあ暫し

あり共かたちをあらいし、此世の思ひをさらさせよと、泣くどけば葛の葉も聲を上、神通とやら得た身よて是程したふが聞へぬか、たつた一言童子に詞をかいして下され、此子いかいふあい事かと、草場にどうと伏轉べば、わきまへしらぬ雅子も、倶に泣こそ哀れあり、そよと吹風、身よしみて、心細き折こそあれ、我子のきづなにからまれて顯れ出し童子が母顔も姿も葛の葉に、又葛の葉の二面二めんの鏡に一人の影うつし。見たるがごとくに保名見るか走り寄、あつかしや床しやあ、いとしかいいの子をふりすて、いづくの浦いづくの里よ住れふぞ、いか成あやしきかたち成共いとふまじ、せめて此子が智惠づく迄育てゝくれよとかつよぞ、ほんに誠に今迄い此葛の葉に成かわり、夫への心遣ひ殊に身腹もいためずよ、よい子を設けし悦びい、よその歎きと成たるかや、人に限らず虫けら迄親子のわかれ、悲しおふておんとせふ、まして哉是い心

よふ添とげてゐる中へ、とびがけあきみづからがばか〳〵と往た故に當惑しての家出かや、けふもけふとて此子がの、うみの母ゝあきとも云らず、やつぱり此葛の葉を、實の親と思ふて心よふ遊べ共、乳をさぐつてかゝゐあふと、泣が悲しい〳〵とわつと計にふしゑづむ、母ゝむせびたへ入しが漸に涙を押へ、誠のかたちを顯ゝしてお目よかくるも恥かしく以前のごとく葛の葉ゐの姿にてゆわけ、おふたり共に聞てたべ、此母が野干の身でさら〳〵夫の色香に迷ゝず、ゐ恩をおくるため斗、年月をかさねしに去がたき因果の胤を身よやどし、古栖へも戻られず、我子につゐがれ暮す内思ゝず此身のざんげをべ、いゝねばあらぬ義理と成、人よゑられて一日も人界の交りかあゝず、扨こそ古郷へ歸りたり、猶此上にも保名樣恨をはれて此子の行末、葛の葉ゐ賴み入と童子を膝よ抱拘へ乳ぶさを含めせあをあでげにや誠よ此子程果報つたあき者ゝあし。

有が中にも畜生の腹をかりしも前世の業、かとおしうおり末ろい、みやづかへする迚を野干の子迚あなづられ、心苦しう思ふらめ、それも誰故此母が人あらぬ身の悲しさよ、と或ハあげき恨わび、身もだへしてぞふし丈つむ、保名もせきくる涙をとゞめ、汝が詞尤あれ共姪婦と變じあまたの人をたぶらかさゞ、吒枳尼天のとがめも有べし是ハ正しく佛躰にひとしき人間を助くるに、天のとがめもあゞか有ん、サア〳〵安倍野へ同道せん、いや〳〵〳〵、それハ思ひも寄ぬ事、色にかぼれ我子よ迷ひ、此身をゑられた其上に、二たび人間に交る時ハ、五万六千の眷属よ疎れ剰へ、畜生害を出やらぬ、其くるしみにハかへがたし、名ごりハ盡じさらば〳〵いとをしの此子やと、顔にあて身よそへて泣丈づみ〳〵、今ハ泣ても悔てもかへらぬ事と立上るを、こハ情あし今暫しと取付をふり拂ひ、すがり付をもぎはなし、此姿ゆへとゞめ給ふ、いで〳〵愛着のきづ

あを切ん誠のかたち是にらんせといふかと思へば忽に、年ふる白狐と身を變じ我子の身の上守らんと、見かへり〳〵おつかしげよ草の、えびみへかくれける、おふ心づらきわかれやあ、其かたちをもいとひいせじ。今えべし暫しといへど其かひゐ嵐につるゝこたまのひゞき草芒〳〵たる信太の原の、草ぼう〳〵たる信太のゐらよ、面かげ斗や殘るらん俤ばかりや「殘るらん折から爰に、旅乘物石津の方よりきたりしが、若黨立より小腰をかゞめ、保名樣よてゐあ、汐行衛を尋んため主人芦屋の道滿遥〳〵くだりゐと。聞より夫婦目を見合せ、ねがふ所の汐尋夫へ參つて對面と女房よさしぞへ渡せばりゝえびよ脇ばさみ、乘物間近くつゝと寄、姉泡の敵覺へがあろ、芦屋殿是へ出て勝負〳〵と聲かくる、こゐ狂籍と下部共立さゐげば、ヤア〳〵騷がしえづまれとゆたかに出る芦屋の道滿、慙髮よ僧衣の姿保名見るよ、ヤア聞へた〳〵、身に覺有敵持ゆつくりと

夜が寢られず、さまをかへて助かる氣か、衣ゝ着ても敵ゝ敵、是成ゝ身が女房葛の葉、姉榊が相果しゝ加茂の家ゝ傳ゝる秘書、汝が奪ひし故おらずや、陰陽奥義の望を失ふ保名が鬱憤晴やらず、丸腰を相手ゝ死人も同前ナア元の武士に立かへり、尋常の太刀打と諧かくれゝちつ共騒がず、お身達が恐ろしとてさまをかゆる道滿おらず、據おき主命父將監の忠死につき、斯のごとく薙髪せり、又榊の前の生害ゝ後室幷ゝ岩倉がおす所、彼家の一卷某が手に入りし疑ひゝさる事おれど、奪ひ取しおどゝゝ保名共覺へぬ一言某が心ゝ左にあらず、互に他事おき弟子兄弟不慮の離義ゝ世をせべめ、此和泉路に漂泊と聞つる斗仕官の身、心に任せず年月を過せしが此度櫻木の親王の御賢慮に叶ひ奉り、大内小博士ゝ任せられ、生國津の國芦屋の庄を給ゝつて、かの地へおもむく折ゝ幸尋來りし其子細ゝ、先師加茂の保憲一字を讓りし秘藏の弟子、保名の繼べき家の

重寶我方ゑ置ん道にあらず、返しあたへん心底ゑて是迄持參致せし、と乘物の内ゟ恭ゑく取出し、此書を考道をひらきふたゝび歸洛致されよ此うへにも我心底疑ゐしくゞともかくもと、詞すゝ歟其有さま保名はつと平伏し、ゑゞし詞もおかりしが、浪人の心の僻情有蘆屋殿ゑ、卒忽の雜言、今更悔かひもおき、色ゑ迷ひし身の越度大内のきこへといひ、主人小野の好古卿ゐ憤憚りあれゞ、保名が出世の望ゐおし、何とぞ世忰を守立家名をつがせゆたしゐ芳志の賜童子に讓り給ゐれと、先非をくゆる夫婦が願ひ、親子の間ゐいづれにても其方の心任せ童子爰へと招がれて葛の葉嬉しくいだきよせ、よその伯父さまが結構な卷物そあたにやろとおつゑやる、行義ゑそこへかしこまりや、そふじや〳〵辭宜ゆゑや、是ゐ〳〵おとおしい成人して學問せい出し、親の名を上られよとわたせゞいたいけ兩手ゑ受、爺樣めんたし仕まするといたゝき〳〵。

巻の表紙を打守り、コレよその伯父様此書付ハ金烏玉兎金烏といふハお日様の中に有三足の金の烏玉兎とハ又お月様の中で餅をつく玉の兎月日を記せし此巻物天地の間にあらゆる事是を見れバ去れるのと、舌も廻らぬ五ツ子のぎよつとした事云出すにゞ、夫婦も驚き道満もあまりの事にこハけ立顔をおがめて居たりしが、おゞろき入たる童子の聰明、尤世上の子供よゝ四ツ五ツで大字を書、繪馬おゞよ上るも是ハ格別、月日の異名の理を辨へ天地のことを去るせし書とハ遁よ保名の教へかたおいさきが思ハれて、夫婦にも嘸浄満悦イヤ此戯言にしゝへ共、父教へざれバ子愚おりと本文ハぞんぢおがら、日かげ者の艱苦の渡世何をおしゆる事もおらず、やりバおしよ育てし世悴、只今の一言親おがらふしぎ晴ず、かれを產し母親ハ當所に年ふる白狐おるが先年助けし恩を思ひ葛の葉が姿と化し我を育む此年來狐と去らず相おれて、出生仕たる此

童子、白狐の才を請つるあらん、恥しき身の懺悔と、聞ん道満手を打て、扨こそ〳〵、尋常あらぬ人相かやうのためしい唐土ゑも、美仙娘といふ狐、南京城外の民黄琢が孝心を感じ、妻と化して一子をうむ、其子の名い黄繼聰明叡智かくれなく、朝ゑつかへて高官たり、此童子も先其ごとく一を聞て十を知る、秀才いかで黄繼ゑいおとるまじ白狐通をそなへし才智試ゑ物といんと、膝の上ゑいだき乘、コレ童子、此日本の始り覺へずやと尋れば、知れた事といん知やる、天神七代地神五代、人皇のはじまりい神武天皇と皆いへど瓊々杵の尊をはじめとする、ず、詳に聞へたり、佛法い大聖世尊釋迦牟尼佛、あまねく日本に弘りしい孫くも聖德太子、ゑ、儒道いいかゑ、大聖人孔子あり三十一字の言の葉い、八雲たつ出雲の湯社素盞嗚の湯神、八重がきつくる詠歌のはじめ、詩いからうたと是を訓、樂の章を元として舜のつくりはじめ給ふと、平仄あいせし請こたへ管絃

樂器もそれ〳〵にわけて尋ぬる琴の緒の數を玄らべて伏犧の作琴のとん三尺六寸和琴の始めん弓六張ひくや釧女の神樂歌笛ん龍の吟ずる調子こちらが持遊び、ぴい〳〵、鳴一文笛や笙の笛、鳳凰の鳥の形鵜殿の芦ん觱篥の舌皷うつ波の聲琵琶の形ん近江の湖一夜の中に驗河の富士山孝靈五年に始まるとん、今辻〻で女夫の讀賣年代記にかいて有、ちんぷん漢字の始めん耆頡いろはにほへとん弘法大師、墨ん薛稷筆ん蒙恬つくりしいんれ有馬筆、人形がひよつこり口から出次第とひ次第雛祭ん嫁入の手あらひ兜ん武藝けいこの始り、天か前かの穴ん一天下法度の博痴の始り紙鳶ん養生の始め終りにけしとみあく、神道王法一〻に問に玄たがひいひわくる、童子が口をかりそめに腹をかしたる母狐、そゞにありとん玄らぎくの花の、隨意見へつ、かくれつきへて、かたちんおかりけり、げよも〳〵疑ひあき、狐の守獲する希代の童子簠簋

内傳の書を明らめ保名の虚名を晴されよ、其義を祝して道満が身不屑あがらゑぼし親、晴明らむるの字をもつて晴明と名乗れよと、扇をひらきあふぎ立あふぎ立れば夫婦が悦びもとより、先祖ハ安倍の仲麿名字をついで安倍野の出生、童子を安倍の晴明とハ此時よりもあづけたり。道満重ていづれもに對面し、日來のねがひ達するうへハ早歸國と存れど、ついでおがら信太の社是よりハいかほど有、イヤわづか半道あまり保名案内仕らん、月の夜すがら道すがら咄しも且ハ慰みがてら、乘物やめていざ同道葛の葉ハ親達の尋見へんも量られず爰にて待と夕月夜いそがぬ芦屋打連て信太の「森へとわかれ行、時もこそ有、悪。右衛門葛の葉を奪ひとらんと、手の者引ぐしおつかけ來り、コリヤ藤次、足弱を同道すればとふくハゆかしと思ひの外、保名めハ逃る共鼻がおてきを手ゑ入よときよろつく眼ゑ乘物見付、ヤア物くさしと立かゝり戸を押明れば葛の

棄親子、いつと驚き逃出るをつこいさせぬとねぢこみおし入、おか様に子添迄保名を生捕よき人質、いそげ〳〵と乗物かゝせ引かへすむかふより、待〳〵。やらぬ奴がやらあい乗物待と棒バあつかみ、とりや〳〵よい〳〵よい所へてうど參つて與勘平、髭が手あみ忘れたか去やうとりもあき悪右衛門乗物おいてつゝゝしれ、命助てとまるのがそつちのためにも與勘平、但し首にかへる氣でこゝりまるかと睨付る、推參ある番椒めうぬが命ゝ天井守り奴豆腐よ切碎けと主從ぬきつれ打てかゝるをかいくゝり〳〵切方早い手づかみ料理、取てゝあげ〳〵さつてもあんばい與勘平、にぐるをやらじとおふて行、道引ちがへ又こゝに、京よりかへる與勘平、刀の鞘よ狀箱結付ひよと〳〵來るを、葛の葉悦び、手がら仕やつた、出かゝやつた悪右衛門ゝ逃おつたか大勢と只ひとり、そあたに怪我ゝあかつたかや、是ゝ何おつゝやる、奴めゝ旦那のは

用一昨日の朝京都へのぼり、左近太郎様ゐに目ゐかゝりお返事い此狀箱安倍野迄戻つて見れば思ひがけない庄司に夫婦、お前のお噂かのゝやうす、びつくりすぐさま參つたいたつた今、手がらのての字びやくらい覺へでいりませぬ、又あの人の臭下をいやる、惡右衛門が大勢追ばらやつた氣味のよさ、此葛の葉がよふ見てゐる、おんぼ見てござらふが覺へおい與勘平、藝にも晴にも髭一人、葛の葉樣あら二人も有はづ、但しお前が彼でいおいか、めつたに傍へよらしやますあと睫ぬらせば、エ、何いやるそおたこそどき〳〵と紛らいしい與勘平、イヤお前がイヤわがみと、あらそふ後ろへむら〳〵と取てかへす惡右衛門、アレにがすあと下知をあす、ヤアよふこそ〳〵石川殿、手がらの覺へおかつたゐさしに來た心中者め、迎もさしてくだんすあら前髪がよかろ物、すりこくつたき男首ゑい儘よ、高野六十那智八十とつてくれんとぬき放し、切てかゝればさし

の大勢立足もおくにげて行、葛の葉ゝ童子をいだき、是々あぶない長追無用戻りや〳〵と身をあせる、ゆんでの畝より落合藤次、ヤア去てやつたと引だかへ中に引さげかけり行、おゞゝ萱原蘭菊の去げみよ有り〳〵興勘平、こりやさ、せぬゝと投退れば、ひるまず拔て打かゝるをまかせておけつゝが早足のゝやわざ切立〳〵「追まくる親子ゝ前後敵の中のがれん方おく乘物の戸を引立て入所へ、二人の奴ゝ敵をゝらひ東西より立歸り、爰ゝあやうし〳〵と乘物片手にさし上しゝ、肩を揃の六尺ゆたか手がらを對の大ゝだぬき、一息つきしゝあうんの二王元腹去たるでとくゝ、重子ゝ物見に顔さし出し、かゝ樣あれを見さつ去やれおれが兵衛がふたりにあつた、奴がぶんじて與勘平と手を打たゝけば、げよ〳〵そふだ〳〵、和子の詞で奴の詮義、コリヤそやつ〳〵乘物おろしてそこへ出おろさ何さ〳〵詮義とゝ與勘平、うぬが五たいもサア持出せろ、サ、サでるゝ〳〵

〳〵、出たん、おれも出るん、出たとゝん奴と奴が顔見合せ、おれがわれか、われがおれかわあの穴のぶ掃除迄、みぢんもかんらぬだいあしたいもんでつかり居た三りの炙すりむけた迄違んぬ〳〵、つく年奴の同作岩やと互に、鞠れし斗ん、葛の葉立出此詮義ん仕やうが有、是こちらあ與勘平、そあたんいくつで奉公して何所の生れじやそれ聞ふ、此罷めん丹波の生れて〻うちぐりが折樫つよく、十一でお家へ參り足手かいさまよせい出しても高が下らうのせい一ばい二合半のもつさうあたまずりとぼつたん十四の春一兩二歩の切米にちがひあい〳〵お前ゐもお聞あされてどんりまゑよ、成程〳〵ぬしの咄しよちがひあい、此奴が身分んすんだ、そやつん又どつから出た、どこから出たとん天からふらず、地からもわかず、木の股からんあを出られずお定りの穴から出た、あんじやあるから、んれよふ出たああ、切米んあんぼとりや、身が切

米ハ十二文ひんねぢ紙の燈明代、本社拝殿玄關前賽錢箱皮覆金紋大總かくれあらあい受領神よぶつ仕へる鳥居の馬場前かゞとう玄つかとぶんつけた二合半の小豆飯色こそかハれ品こそかハれ、其お子產だ白狐女郎ハからが中間の寄親殿だ頼むに引れずぬつと出た、奴が出生穴かしこ人にかたるあおみあへし桔梗かるかや吾木香、身ハ蘭菊に遊べ共咄しの尾花ハいつかあ出さあい、惡右衞門主從ハ此與勘平に打まかせ、親子の衆のお供してつれて退たが與勘平心得たるかをいひけれバ、扨てもさつぱりヤたり、中間うちの尻持とハ頼もしい野干平、差圖にまかせお供せふ、惡右衞門の若鼠あおづつて蹄にかゝるな、よそおがら一曲見物と童子をせおに生玄げる、葛の葉がくれ草がくれ忍びて「事を窺ひぬる、石川が手足と頼む藤次藤内市八源太、腕に覺への早縄玄つてい狐ピ玄らぬ捕手の不覺、だまし寄てはつしと打ひらりと飛で乘物のう

にかるゝ〳〵ちよこ〳〵足仕そんじたりと追取卷、四人が四すみゝ手をかけてぐつとあぐれゞゝつことわらひ、祭り過てのお傍興だいこしちやうさやようさ、あれ〳〵信太の神いさめ爰に聞へて、笛たいこ天罰神罰挫いでくれんと身ゝいあづまの通力じざい、はた〳〵はつしと蹴たをす拍子太鼓の拍子も面白や、小歌ぶしゝてかへろやれ、我古つかへ戻ろやれ、我古つかへ歸りやれ、かへせ〳〵とつゞあの穂先乱るゝ薄秋の野の花をちらして「爭ひけり、狐の所爲に魂奪ゝれ五躰ふぬけてよろぼふやつ原、引寄〳〵捻付ふみ付命かゝりの早剃刀あらみのおこぞりいたゞけと耳鼻かけてでそ〳〵、ずんぼろ坊主にすりこぼち縣ぼん〳〵つゞけぶみ、四人ゝ命からゞゝあたまかゝへて逃走れゞゝこん〳〵ゝいけい悦びのおくねを野路の夜嵐ゝ立まぎれてぞ失にける、道滿保名ゝ下向道葛の葉親子與勘平、右のあらまし語るにぞ是もひと

へゐ信太の明神、擁護のしるし有がたしとかへりもうしの遙拜三拜、猶行先ゝ草ふかき敵の伏兵氣づかひ、挑燈ともせ與勘平、ナイと返事ゝ以前の奴、向ふにたちまち顯ゝれ出、道の明りゝ我等の得物、野山も一目ゐ照かゞやく千疊敷の大燭臺、それゝ蠟燭十二挺是ゝ狐の千丁竹畠千町、里千町千年功ふる友呼聲、姿ゝきへてともす火の千燈万燈滿々月、ひかりも滿る晴明親子出世の門を和泉路や信太の、もりのふる事を、あらたゐ寫す筆の跡語り、傳へて云るとかや

第五

讖を知て、慎ざれゞ禍遠きにあらずとかや、陰陽師安倍の保名浪々の身の年月も、早八才の晴明ゐ自然と妙術備ゝれるを、古主へいひ立ふたゝび歸參を願ゝんと、西の京の旅宿より妻子引つれ行道も、往來をだへし一條の橋詰にさしかゝり、ハレ〳〵向ふへ見ゆるゝ左近太郎、是幸といふ間程

あく互ゑ行あふ橋の上、照綱殿何方へ、保名殿は親子は揃ひ、よい所でお目にかゝつた貴殿歸參の義、は聞届け有ては赦免其うへは子息、才智勝れし段殊あいは賞美、何卒天下の博士ゑもあるべき間、明朝ゝ參内せさせ其趣きを奏問せん、先今日召よせ對面あされんとの仰、それ故は子息迎の爲、今は宿所へ參る所、先ゝ吉左右、拙者も滿足仕る、ハア、是ゝ〳〵冥加に余る仕合せ、好古公のは憐愍ゝヤに及べず、偏に貴殿のは執成と云ゑ葛の葉俱悦びおあじみ迎捨置れず、段々のは世話お禮ゝ詞に盡されず、此上おがらは前の首尾宜しう頼上まする、何の〳〵懇意の中ゑお禮ゝ無益同道仕らふ、ハア いや〳〵、先年當所を立退て、主君のは用をかきたる某、いかにの赦免あれべ迎、お召もおきに押付て參るゝ憚、餘さへ出世致せべ、拙者が義ゝくるしからず、罷歸つて明日の吉左右を待ヤさん、コリヤ女房餘ゑ付添早く參れ、は苦勞おがら頼み入、スリヤぜひ共お歸りか、

然らば涉兩所伴ひ歸らん、さらば〳〵と立歸れば、保名も跡へ引かへす遥向ふへ惡右衛門、數多の家來に長櫃舁せ先に勸んで歩みくる、シヤ曲者子細ぞ有んと保名ゝ忍んで窺ふ所へ程なく來る惡右衛門、件の櫃を橋の半ばとづかとおろさせ、主從あたふたかしひらき取出すゝ藁人形、家來共口〳〵に、見た所が風の神、はやる病のさたもないに、旦那こりや何あさるゝ、サレハ〳〵子細いゝねば合點が行まい、是ぞ日ごろくい〳〵思ふ六の君を呪詛の爲いぜんも術ゐて呼出し、肝心要でえくぢつた、夫故今度ゝ丈夫ゐ仕かけ、居あがらところりとやるつもり、彼道滿の內膀がうやく、賴んでゝ却て妨、ふだんはし〳〵聞覺へた術を行ひ、是を見よ此でとく、四十四本の釘を打呪詛の文を書付、此川へ打込思案、コリヤ〳〵家來共、ハ菩薩が池にこり果た、そこらに非人ゝからぬかと、せんさくさせてよいゝ〳〵からぬゝ重々、サア用意と聞ば保名とんで出、前後の家來を取て投退ふみ

飛し、人がたもさ取聞た〳〵殘らず聞た惡事の根組、殊に段々意趣有中、
運れゝ有じ覺悟せよ、ヨ、是を露顯せられてゝ、主君の大望後日の仇、此方
の覺悟かうぬが髏に暇乞、それ家來共遁すあと打てかゝれゞ心得たり
と拔合せ、かゝれゞはらひ裙を拋れゞ飛ちがひ、付入ゞ打ひらき秘術を
盡し働きしが運の極めか橋板に、けしとむ所を付入付込、ゞつた〳〵大
勢寄て連耡切あへあく息ゝ絶よけり、ヤ、ア氣味よふくたゞつた、ヤ跡の難難
ゝどふあさるゝ、ヲ、サ合點此櫃に死髏と人がた相住させ、深みへづぶ〳〵
氣づかひするあと、主從櫃へ押込ねぢ込秘封を付、サア〳〵かゝれを手々よ舁
上、ざんぶと打込川流れ、サア仕すました〳〵、者共來れと引連て我家をさ
してぞ、一行空の雲井長閑き大内山內宴を行ゝれ、群臣諸卿參列し君を蕩
き奉る、櫻木の親王は褥につき玉へゞ、續いて右大將備の元方、參議小野
の好古は座近く伺公して、葛の葉親子をは階に召連謹で奏せらるゝ、勵

臣が家來安倍の保名が世悴晴明今年八才いまだ幼稚とヤせ共陰陽道に妙術を得れば則帝都に居住させ芦屋の道満兩家として、天下の安危を密奏せば代長久の基共ありいんと言上あれば、右大將聞もあへず、コレ〳〵好古、其保名とい加茂の保憲が末弟陰陽未熟のうつけ者、先年都を逐電し、うらやさん辻八卦に身命を繋ぐと聞、其中よもうけたる晴明とやら、あくちもきれぬ小世悴、陰陽道の妙術とい事おかしき奏問、今一天下よあらびあき芦屋の道満有からい、占もは祈禱も一人で有あまる、コリヤせがれ願ひい叶いぬ退參せよと無法の詞、聞兼て葛の葉コヽ心得ぬは仰、稚き者迎悔らば、唐土の陸雲い六才にて、文をよくし書をそらんじたる例もあれば、一概にいいはれぬ物、夫にあんぞや雲つくやうな形をしてちいさき者をやりとめ〳〵、ヱヽ何じやの、あたどんくさいと詞もずつかり顔も色立せき上れば、ヤアすゝふりのべり〳〵め、元方に向つて緩怠至

極、アレ引立よと下知すれば、親王えばしとえづめ玉ひ、元方の詞一理有と
いへ共、好古の心無下にも成まじ所詮論い無益おさおさ者が妙術を目
前ゑ見るあらば、彼らが願ひに任すべしと下をめぐみの沒詞、末世に村
上天皇と仰がれ玉ふも理りえ、折こそ有左近太郎照綱長櫃沒前に舁す
へさせ、貢を納る近郷の百姓共、一條の邊にて此櫃を拾ひし所、下ゑてひ
らき見ん事上を憚上覽に備へ奉ると訴ふれば、諸卿も怪しみ元方い胸
に覺への有長櫃、ゴリヤ〳〵左近見ぐるしい雜物大内の穢持て立と、いらてば
親王とゆめ玉ひ、中のえれざる長櫃是ゑ幸、道滿晴明立あらび中を未然
に考へさせよと、仰に元方力及ばず、ゴリヤ〳〵小せがれ、若汝仕損せば遠島さ
すが合點かと、勝手たらけゑ詞詰、それ〳〵と有ければ非藏人の卜次、司
天臺に扣へたる陰陽の頭芦屋の道滿、裝束改め召に應じてえづ〳〵と
ば階間近く座に着ば、元方打ゑみ、ヤレ待兼た見通し殿、是此櫃の中を考あ

のちつぺいめを拙いでたも、ハツト答へて道滿、コレ〳〵晴明、先其方から考られよ、イヤ其元から言上有、然らば拙者ヤ上んを眼をとぢ、方角をくり時刻を合せ謹で、ア是ハ正しく二人の体、一人ハ仮の形をもふけし物、今一人ハ三十有余の男及ばかゝりし死骸にてゆと、言上すれば元方點頭、ヲヽ今よ始めぬ汝が考へそふで有ふ、サア〳〵せがれハ何と〳〵、はつといふか袂の中ゆびくりかへせば道滿が察する所寸分たがハずあむ三實、先をとされしロ惜やとをゝろく胸を押えづめ、えべらく思案し、成程道滿ヤさるゝ通、一人ハかりの形今一人ハ三十有余の男及ばかゝりゆへ其、未落命とハ見へず魂魄五体よ在されば悉あしをいふよ惚りコレ〳〵晴明、此道滿がヤ所汝が胸にてつしあべ有やうよヤされよ、元占ハ一体の氣を考ゆれば互に合まい物であし、少しよても相違せば汝が身の一大事、今一應工夫有と氣の毒顔にうらぎへば葛の葉ハ猶氣遣コレ〳〵晴明兩方の考一

致した迚耻ゐゝあらず、あまあかそちが我をはつて品かへんとゞし思やんあ、みぢんでもちがふてゝ大事の所じやとつくりと氣を云づめてヤあぎや、ふたを明ぬ其内ゝ云直しても仕直しても隙が入ても大事あいと、そゞからあぶ〳〵井戸のはた子を思ふ身ぞ道理ある、瀧口にさしひかへ始終を聞ゐる悪右衛門、折よしとつゝと出、陰陽道ゐ妙術を得し者がいひあをしゝあらぬ〳〵、もしふたあけて死骸が出ゞゆるさぬが合点かと、おのれが覺へしたり顔元方に目と目を見合、あざける詞を耳にもかけず、母様氣づかひあさるゝあ、迚その事に刀疵たち所ゐ平愈させ、ゆ覽に入んとひたゝれの袖をむずんで肩にかけ幣帛取て禮拜し、あむ大聖文殊薩埵、一たびむすびしきゑんをたがへず、力をそへてたび給へと傳へ請たる太山王の密法生活續命の秘文をとゐへ、諸神諸佛をくゝんゑやう有、

晴明蘇生の祈

謹上、再拜〳〵。敬白奉る、神ハ元來正直のかうべを照す日の本の、いとゐ尊き宮所、いすゞのあがれ清らかゑ、かげをうつして、三くま野ハ、とさかをはやたまをひりやう權現王子權現九十九所、納受有て給ハれと、鈴追取てきりん〳〵、いちじきんりん金峯山藏王權現立像權現、葛城七たいこんがうどうし、我もどうしの、其ひとつきめう〳〵と名ゑゐ、たつ田のもみぢばや、錦おるてふ糸筋の、三わげ殘りて三輪の山、三笠の山にほの〳〵と月住吉の神かぐらきねが小鼓、唱たり舞たり幣帛取かへひら〳〵ひらり〳〵、ひらくる梅の宮、花ハちりてもねゑかへる歸れや、かへれを呼子鳥、錫杖取てふり立〳〵、高き御山ハ愛宕山、鞍馬山にハ多門天持國增長廣目の四天王にも先立て、神道如意の駒に鞭を、打かけ〳〵、雲に乘三千世界を廻るゐだ天王、孔雀明王大ゐとく、見せしめ給へと又ふり立て

がら〳〵こんがらせいたか、不動愛染、扨王城にハ加茂八幡、まさるめでたき山王權現多賀の神、たとへ定業限命おり共、拔苦與樂のまゆをたれ一度蘇生せさせてたべとかんたんくだきひたゝれを汗に浸して「祈ける行力終法の證にや東西ゟ數多の烏、むら〳〵さつと飛來り櫃の上ゑ寄集り暫く鳴聲憂を呼又立上つてくる〳〵、くるり〳〵と飛廻り悅びの聲喧く四方に別れて飛去けり、晴明虛空を禮拜し疑ひもなき蘇生の志るし、サア〳〵ふたをひらかれよと聞もあへず惡右衞門、ちつべいめがはでてんがう、明て恥をかゝせんと、櫃のふた手をかくれぺめり〳〵はつしと打挫き、によつと出たる安倍の保名、惡右衞門がゝんづか摑んでどふど打付足下にふまへ、左大將と心を合せ六の君、調伏の此人がた、遁れぬ所とふみ付〳〵、劒難ふしぎに蘇生の保名、しやばに再び戻り橋此時よりぞおづけゝる、始終を聞て左近太郎、ゝ、一度にとりぬ天

命去らずと高欄に手を廻し、左大將をかいつかみ引かづいて投付れば、道滿しばしと押とゞめ彼前ゝ向ひ罪人とゝ申おかゝら彼息所の御父、命の義ゝは赦免と恐れ、入て願ひける、ヲ、神妙ゝ道滿汝が願ひゝまかせ遠島流罪惡右衞門ゝ保名親子が心任せに斗らふべし、と仰を聞よりいさみをあし傳に討れし保名が敵本望遂るも此保名と、寸斗〳〵に切放せば親王御威淺からず晴明ゝ官位をさづけ、道滿諸共天下の博士末の代迄も晴明と云傳へ書傳へ家の波風動きなきは代に羽をのす雛鶴の御下の八數大八洲君万歳の壽ゝ、民千歳の五穀成就富榮ふるこそめでたけれ

于時享保十九甲寅年十月五日

蘆屋道滿大内鑑　終

明治廿六年七月廿九日印刷
明治廿六年八月　二日發行

（定價金十五錢）

蘆屋道滿大内鑑

飜刻兼發行者　日本橋區通四丁目四番地　内藤加我

印刷者　日本橋區新和泉町壹番地　瀧川三代太郎

發兌　日本橋區通四丁目四番地　金櫻堂

印刷所　日本橋區新和泉町壹番地　今古堂活版所